

ヨブ記

第一章

一 ヲツの地にヨブと名くる人あり其人と爲完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる 二 その生る者
 三 は男の子七人女の子三人 三 その所有物は羊七千駱駝三千牛五百羈牝驢馬五百僕も夥多しくあり
 四 此人は東の人の中にて最も大なる者なり 四 その子等おのおの己の家にて己の日に宴筵を設くる事を爲しその三
 五 人の姊妹をも招きて與に食飲せしむ 五 その宴筵の日はつる毎にヨブかならず彼らを召よせて潔む即ち朝はやく
 興き彼ら一切の數にしたがひて燔祭を獻ぐ是はヨブ我子ら罪を犯し心に神を忘れたらんも知べからずと謂てなり
 ヲブの爲とて常には是のごとし

六 或日神の子等きたりてエホバの前に立つサタンも來りてその中にあり 七 エホバ、サタンに言たまひける
 八 は汝何處より來りしやサタン、エホバに應へて言けるは地を行めぐり此彼經あるきて來れり 八 エホバ、サタン
 に言たまひけるは汝心をもちひてわが僕ヨブを觀しや彼のごとく完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる人
 九 世にあらざるなり 九 サタン、エホバに應へて言けるはヨブあにもとむることなくして神を畏れんや 一〇 汝彼と
 その家およびその一切の所有物の周圍に藩屏を設けたまふにあらずや汝かれが手に爲とてを盡く成就せし
 二 むるがゆゑにその所有物地に遍ねし 二 然ど汝の手を伸て彼の一切の所有物を撃たまへ然ば必ず汝の面にむかひ
 三 て汝を誑はん 三 エホバ、サタンに言たまひけるは視よ彼の一切の所有物を汝の手に任す唯かれの身に汝の手を
 つくる勿れサタンすなはちエホバの前よりいでゆけり

イ創二三・二〇、二二 八創六・九、一七、一 ホ創八・二〇 伯四二 三三八・七 七詩一三・八、一、二 箴一〇・二二、一四 一三三・一四 馬三・
 口結一四・一四 雅五 伯二・三 八 伯三・二 太一三・ 一 伯一・一 一〇・二二、一四 一三三・一四 馬三・
 二 箴八・二三、一六、六 へ王上三三・一九 伯 四三 彼前五・八 又詩三四・七 箴五・二 一 伯三・五、一九、二二

カ傳九・二二
ヨ伯一・四・二三
タ創三七・二九
レ彼前五・六
ソ傳五・一九
雅一・ナ弗五・二〇
撒前五
ム伯一・六
ウ伯一・七
・一五
提前六・七
ネ太二〇・一五
・二八
井伯一・一八
ノ伯九・一七
オ伯二七・五・六
ク伯一・二一
ヤ伯一九・二〇

二三 或日ヨブの子女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲むたる時 使者ヨブの許に來りて言ふ牛耕しをり

二四 牝驢馬その傍に草食をりしに 一五 シバ人襲ひて之を奪ひ刃をもて少者を打殺せり我たゞ一人のがれて汝に告んと

二五 來れりと 一六 彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふ神の火天より降りて羊および少者を焚て滅ぼせり我たゞ

二六 一人のがれて汝に告んとて來れりと 一七 彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふカルデア人三隊に分れ來て駱駝

二七 を襲ひてこれを奪ひ刃をもて少者を打殺せり我たゞ一人のがれて汝に告んとて來れりと 一八 彼なほ語ひをる中に

二八 又一人きたりて言ふ汝の子女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲をりしに 一九 荒野の方より大風ふき來て家の

二九 四隅を撃ければ夫の若き人々の上に潰れおちて皆しねり我これを汝に告んとて只一人のがれ來れりと

三〇 是においてヨブ起あがり外衣を裂き髪を斬り地に伏て拜し 二一 言ふ我裸にて母の胎を出たり又裸にて彼處

三一 に歸らんエホバ與へエホバ取たまふなりエホバの御名は讚べきかな 二二 この事においてヨブは全く罪を犯さず

神にむかひて愚なることを言ざりき

第二章

一 或日神の子等きたりてエホバの前に立つサタンも來りその中にありてエホバの前に立つ 二 エホバ、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしやサタン、エホバに應へて言けるは地を行めぐり

三 此彼經あるきて來れり 三 エホバ、サタンに言たまひけるは汝心をもちひて我僕ヨブを見しや彼のごとく完全

四 かつ正しくして神を畏れ惡に遠ざかる人世にあらざるなり汝われを勸めて故なきに彼を打惱さしめしかど彼なほ己

を完うして自ら堅くす 四 サタン、エホバに應へて言けるは皮をもて皮に換るなれば人はその一切の所有物を

五 もて己の生命に換ふべし 然ど今なんぢの手を伸て彼の骨と肉とを撃たまへ然ば必らず汝の面にむかひて汝を

六 詛はん エホバ、サタンに言たまひけるは彼を汝の手に任す只かれの生命を害ふ勿れと

七 サタンやがてエホバの前よりいでゆきヨブを撃てその足の跣より頂までに悪き腫物を生ぜしむ ヨブ

八 土瓦の碎片を取り其をもて身を掻き灰の中に坐りぬ 時にその妻かれに言けるは汝は尙も己を完たうして自ら

九 堅くするや神を詛ひて死るに如すと 然るに彼はこれに言ふ汝の言ところは愚なる婦の言ところに似たり我ら

一〇 神より福祉を受るなれば災禍をも亦受ざるを得んやと此事においてはヨブまつたくその唇をもて罪を犯さざりき

一 時にヨブの三人の友この一切の災禍の彼に臨めるを聞き各々おのれの處よりして來れり即ちテマン人エリ

二 パズ、シユヒ人ビルダデおよびナアマ人ゾバル是なり彼らヨブを弔りかつ慰めんとして互に約してきたりしが

三 目を擧て遙に觀しに其ヨブなるを見識がたき程なりければ齊く聲を擧て泣き各々おのれの外衣を裂き天にむ

四 かひて塵を撒ておのれの頭の上にちらし 乃ち七日七夜かれと偕に地に坐しゐて一言も彼に言かくる者なかり

五 き彼が苦惱の甚だ大なるを見たればなり

第三章

一 斯て後ヨブ口を啓きて自己の日を詛へり ヨブすなはち言詞を出して云く 我が生れし日亡

二 びうせよ 男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ その日は暗くなれ 神上よりこれを願たまはざ

三 れ 光これを照す勿れ 黑暗および死蔭これを取もどせ 雲これが上をおほへ 日を暗くする者これを懼しめよ

四 その夜は黑暗の執ふる所となれ 年の日の中に加はらざれ 月の數に入ざれ その夜は孕むこと有ざれ 歡喜の

五 聲その中に興らざれ 日を詛ふ者レビヤタンを激發すに巧なる者これを詛へ その夜の晨星は暗かれその

六 夜には光明を望むも得ざらしめ 又東雲の眼蓋を見ざらしめよ 是は我母の胎の戸を闔すまた我目に憂を見ること

イ伯一・二二 四二・六 結二七・ 水伯一・二二 羅二二 へ伯一・二二 四九・七 一・二・一五 ヲ制五〇・一〇 二・二四
ロ賽一・六 三〇 太一・二二 二・二二 雅五・一〇、 ト詩三九・一 四九・七 一・二・一五 一・二・一五 一〇・一八、一九 カ伯一〇・二二、二二、
ハ母後一三・一九 伯 二伯二・三 一一 耶 又伯四二・二一 羅 結二七・三〇 耶 一五・一〇、二〇 一六・一六、二八、

三詩二三・四、四 一六六 摩五・八 一・二二
 四・一九、一〇七、ヨ伯一〇・一八 レ伯一五・二八
 一〇・一四 耶一三 夕刺三〇・三 黎六六 ソ詩五八・八
 ツ伯三九・七 四・二七 彼三一・六 ウ伯一九・八 哀三・七 才伯一・一
 木耶二〇・一八 ヲ歌九・六 井黎三五・三 夕刺三二・六
 ナ母前一・一〇 王下 ム彼二・四 ノ黎三五・三 ヤ詩三七・二五
 八 何一〇・一三 加六・七、八

二二 何とて我は胎より死て出ざりしや何とて胎より出し時に氣息たえざりしや 如何

三 となれば膝ありてわれを接しや如何なれば乳房ありてわれを養ひしや 否らずば今は我優て安んじかつ眠らん然

二四 ばこの身やすらひをり かの荒墟を自己のために築きたりし世の君等臣等と偕にあり かの黄金を有ち白銀

二五 を家に充したりし牧伯等と偕にあらん 又人しれず墮る胎児のごとくにして世に出ずまた光を見ざる赤子の

二六 ごとくならん 彼處にては悪き者虐遇を息め倦憊たる者安息を得 彼處にては俘囚人みな共に安然に居りて

二七 驅使者の聲を聞ず 小き者も大なる者も同じく彼處にあり僕も主の手を離る 如何なれば艱難にをる者

二八 に光を賜ひ 心苦しむ者に生命をたまひしや 斯る者は死を望むなれどもきたらずこれをもとむるは藏れたる

二九 寶を掘るよりも甚だし もし墳墓を尋ねて獲ば大に喜び樂しむなり その道かくれ神に取籠られをる人に

三〇 如何なれば光明を賜ふや わが歎息はわが食物に代り我呻吟は水の流れそゝぐに似たり 我が戦慄き懼れ

三一 し者我に臨み我が怖懼れたる者この身に及べり 我は安然ならず穩ならず安息を得ず惟艱難のみきたる

第四章

三二 時にテマン人エリパズ答へて曰く 人もし汝にむかひて言詞を出さば汝これを厭ふや然ながら

三三 誰か言で忍ぶことを得んや さきに汝は衆多の人を誨へ諭せり 手の垂たる者をばこれを強くし

三四 つまづく者をば言をもて扶けおこし膝の弱りたる者を強くせり 然るに今この事汝に臨めば汝悶えこの事

三五 なんぢに加はれば汝おちまごふ 汝は神を畏こめり是なんぢの依頼む所ならずや汝はその道を全うせり是

三六 なんぢの望ならずや 請ふ想ひ見よ誰か罪なくして亡びし者あらん義者の絶れし事いづくに在や 我の觀

三七 る所によれば不義を耕へし惡を播く者はその穫る所も亦是のごとし みな神の氣吹によりて滅びその鼻の息に

一〇 よりて消うす 獅子の吼 猛き獅子の聲ともに息み 少き獅子の牙折れ 大獅子獲物なくして亡び 小獅子散失す
 一三 前に言の密に我に臨めるありて我その細聲を耳に聞得たり 即ち人の熟睡する頃我夜の異象によりて想ひ煩ひをりける時 身に恐懼をもよほして戦慄き骨節ごとごとく振ふ 時に靈ありて我面の前を過ければ我は身の毛よだちたり 一六 その物立とまりしが我はその状を見わかつことをえざりき唯一の物の象わが目の前にあり 時に我しづかなる聲を聞けり云く 一七 人いかで神より正義からんや人いかでその造主より潔からんや 一八 彼はその僕をさへに恃みたまはず 其使者をも足ぬ者と見做たまふ 一九 況んや土の家に住をりて塵を基とし 蜉蝣のごとくに亡ぶる者をや 二〇 是は朝より夕までの間に亡びかへりみる者もなくして永く失逝る 二一 その魂の緒めに絶ざらんや皆悟ること無して死うす 二二 請ふなんぢ顧びて看よ誰か汝に應ふる者ありや聖者の中にて誰に汝むかはんとするや 二三 夫愚なる者は憤恨のために身を殺し 癡き者は嫉媚のために己を死しむ 二四 我みづから愚なる者のその根を張るを見たりしがすみやかにその家を誣へり 二五 その子等は助援を獲ることなく 門にて惱まざる 之を救ふ者なし 二六 その穢とれる物は飢たる人これを食べ 荆棘の籬の中にありてもなほ之を奪ひいだし 霜その所有物にむかひて口を張る 二七 災禍は塵より起らず 艱難は土より出ず 二八 人の生れて艱難をうくるは火の子の上に飛がごとし 二九 もし我ならんには我は必らず神に告求め 我事を神に任せん 三〇 神は大にして測りがたき事を行ひたまふ 三〇 其不思議なる事を爲たまふこと數しれず 三一 雨を地の上に降し水を野に遣り 三二 卑き者を高く擧げ憂ふる者を引興して幸福ならしめたまふ 三三 神は狡しき者の謀計を敗り之をして何事をもその手に成就ること能はざ

第五章

一 請ふなんぢ顧びて看よ誰か汝に應ふる者ありや聖者の中にて誰に汝むかはんとするや 二 夫愚なる者は憤恨のために身を殺し 癡き者は嫉媚のために己を死しむ 三 我みづから愚なる者のその根を張るを見たりしがすみやかにその家を誣へり 四 その子等は助援を獲ることなく 門にて惱まざる 之を救ふ者なし 五 その穢とれる物は飢たる人これを食べ 荆棘の籬の中にありてもなほ之を奪ひいだし 霜その所有物にむかひて口を張る 六 災禍は塵より起らず 艱難は土より出ず 七 人の生れて艱難をうくるは火の子の上に飛がごとし 八 もし我ならんには我は必らず神に告求め 我事を神に任せん 九 神は大にして測りがたき事を行ひたまふ 一〇 其不思議なる事を爲たまふこと數しれず 一一 雨を地の上に降し水を野に遣り 一二 卑き者を高く擧げ憂ふる者を引興して幸福ならしめたまふ 一三 神は狡しき者の謀計を敗り之をして何事をもその手に成就ること能はざ

一詩五八・六 二哈三・一六 五 彼後二・四 九 詩九〇・五、六 一〇 伯三六・二二 一三 詩二一九・一五五 一四 伯九一〇、三七・ 一五 詩三四・一〇 一六 伯九二 一七 伯一五・一六 一八 詩三九・一、四九 一九 詩三七・三五、三六 二〇 詩三三・一五 二一 伯一五・一五、二五 二二 詩四七・七、五・一 二四 詩三九・一、四九 二五 詩三七・三五、三六 二六 詩二一九・一五五 二七 伯九一〇、三七・ 二八 詩四〇・五、七 二九 伯二八・二六 三〇 詩三三・一五 三一 伯一五・一五、二五 三二 詩四七・七、五・一 三三 詩二一九・一五五 三四 伯九一〇、三七・ 三五 詩四〇・五、七 三六 伯二八・二六 三七 伯三三・一五 三八 詩四七・七、五・一 三九 詩二一九・一五五 四〇 伯九一〇、三七・ 四一 詩四〇・五、七 四二 伯二八・二六 四三 伯三三・一五 四四 詩四七・七、五・一 四五 詩二一九・一五五 四六 伯九一〇、三七・ 四七 詩四〇・五、七 四八 伯二八・二六 四九 伯三三・一五 五〇 詩四七・七、五・一 五一 詩二一九・一五五 五二 伯九一〇、三七・ 五三 詩四〇・五、七 五四 伯二八・二六 五五 伯三三・一五 五六 詩四七・七、五・一 五七 詩二一九・一五五 五八 伯九一〇、三七・ 五九 詩四〇・五、七 六〇 伯二八・二六 六一 伯三三・一五 六二 詩四七・七、五・一 六三 詩二一九・一五五 六四 伯九一〇、三七・ 六五 詩四〇・五、七 六六 伯二八・二六 六七 伯三三・一五 六八 詩四七・七、五・一 六九 詩二一九・一五五 七〇 伯九一〇、三七・ 七一 詩四〇・五、七 七二 伯二八・二六 七三 伯三三・一五 七四 詩四七・七、五・一 七五 詩二一九・一五五 七六 伯九一〇、三七・ 七七 詩四〇・五、七 七八 伯二八・二六 七九 伯三三・一五 八〇 詩四七・七、五・一 八一 詩二一九・一五五 八二 伯九一〇、三七・ 八三 詩四〇・五、七 八四 伯二八・二六 八五 伯三三・一五 八六 詩四七・七、五・一 八七 詩二一九・一五五 八八 伯九一〇、三七・ 八九 詩四〇・五、七 九〇 伯二八・二六 九一 伯三三・一五 九二 詩四七・七、五・一 九三 詩二一九・一五五 九四 伯九一〇、三七・ 九五 詩四〇・五、七 九六 伯二八・二六 九七 伯三三・一五 九八 詩四七・七、五・一 九九 詩二一九・一五五 一〇〇 伯九一〇、三七・

耶五・二四、一〇、ソ詩九・一五 哥前三 ナ母前二・九 詩一〇 三・一九 二七
一三 徒一四・一七 〇・一九 七・四二 中三三・三九 哥前 哥前一〇・一三 何二
ク詩二二・二二 二・六 賽三〇・二六 牛詩三三・二九、三七 二八 二七
フ詩二七・三三 五九・一〇 二・一、二 來一 何六・一 二九 七詩七二・二六 七詩三三・二二
ナ詩三五・一〇 五 雅一・二 賦ウ詩三四・一九、九一 ノ詩三一・二〇 〇 九 九二
マ詩九・二二、一〇 〇 八 八・二五、一六 九二

らしめ 慧き者をその自分の詭計によりて執へ邪なる者の謀計をして敗れしむ 彼らは晝も暗黒に遇ひ

卓午にも夜の如くに摸り惑はん 神は惱める者を救ひてかれらが口の剣を免かれしめ強き者の手を免かれし

めたまふ 是をもて弱き者望あり 悪き者口を閉づ 神の懲したまふ人は幸福なり 然ば汝全能者の儆責

を輕んずる勿れ 神は傷け又裏み撃ていため又その手をもて善醫したまふ 彼はなんぢを六の艱難の中にて

救ひたまふ 七の中にてても災禍なんぢにのぞまじ 饑饉の時にはなんぢを救ひて死を免れしめ 戦争の時には劍

の手を免れしめたまふ 汝は舌にて鞭たるゝ時にも隠るゝことを得 壞滅の來る時にも懼るゝこと有じ 汝は

壞滅と饑饉を笑ひ 地の獸をも懼るゝこと無るべし 田野の石なんぢと相結び 野の獸なんぢと和がんで 汝は

おのが幕屋の安然なるを知ん 汝の住處を見まはるに缺たる者なからん 汝また汝の子等の多くなり 汝の裔の

地の草の如くなるを知ん 汝は遐齡におよびて墓にいらん 宛然麥束を時にいたりて運びあぐるごとくなる

べし 視よ我らが尋ね明めし所かくのごとし 汝これを聽て自ら知れよ

第六章

然すれば是は海の沙よりも重からん 斯ればこそ我言躁妄なりけれ 四 それ全能者の箭わが身に

いりわが魂神その毒を飲り 神の畏怖我を襲ひ攻む 野驢馬あに青草あるに鳴んや 牛あに食物あるに哖らんや

淡き物あに鹽なくして食はれんや 蛋の白あに味あらんや 七 わが心の觸ることを嫌ふ物 是は我が厭ふ所の食物

のごとし 願はくは我求むる所を得んことを願はくは神わが 希ふ所の物を我に賜はらんことを 願は

〇 くは神われを滅ぼすを善とし御手を伸て我を絶たまはんことを 然るとも我は尙みづから慰むる所あり 烈し
 二 き苦痛の中にありて喜ばん是は我聖者の言に悖りしことなければなり 我何の氣力ありてか尙俟ん 我の終い
 三 かなれば我なほ耐へ忍ばんや わが氣力あに石の氣力のごとくならんや 我肉あに銅のごとくならんや わが
 四 助われの中に無にあらすや 救拯我より逐はなされしにあらすや 憂患にしづむ者はその友これを憐れむべ
 五 し 然らずば全能者を畏るゝことを廢ん わが兄弟はわが望を充さざること溪川のごとく溪川の流のごとくに
 六 過さる 是は氷のために黒くなり雪その中に藏るれども 温暖になる時は消ゆき熱くなるに及てはその處に
 七 絶はつ 隊客旅身をめぐらして去り空曠處にいたりて亡ぶ テマの隊客旅これを望みシバの旅客これを慕ふ
 八 彼等これを望みしによりて愧恥を取り彼處に至りてその面を赧くす かく汝等も今は虚しき者なり汝らは
 九 怖ろしき事を見れば則ち懼る 我あに汝等我に予へよと言しこと有んや 汝らの所有物の中より物を取て我た
 一〇 めに饋れと言しこと有んや また敵人の手より我を救ひ出せと言しことあらんや 虐ぐる者の手より我を贖へと
 一一 言しことあらんや 我を教へよ 然らば我黙せん 請ふ我の過てる所を知せよ 正しき言は如何に力ある
 一二 ものぞ 然ながら汝らの規諫る所は何の規諫とならんや 汝らは言を規正んと想ふや 望の絶たる者の語る所は
 一三 風のごときなり 汝らは孤子のために籤を擧ぎ 汝らの友をも商貨にするならん 今ねがはくは我に向へ
 一四 我は汝らの面の前に偽はらず 請ふ再びせよ 不義あらしむる勿れ 請ふ再びせよ 此事においては我正義し
 一五 我舌に不義あらんや 我口悪き物を辨へざらんや

第七章

一 それ人の世にあるは戦闘にあるがごとくならずや 又其日は傭人の日のごとくなるにあらすや

イ利一九・二 賽五七 へ詩三八・一一、四一 ホ制二五・一五
 ・一五 何一一・九 九 へ王上一〇・一 詩 ト耶一四・三
 口箴一七・一七 二耶一五・一八 七二・一〇 結二七 チ伯一三・四
 リ詩三八・一一 又伯一四・五、一三、一 四 詩三九・四

ル伯二九・二
ヲ申二八・六七 伯
一七・二二
ヲ賽一四・二一
カ伯九・二五、一六・

二二、一六・二二、
一七・二一 詩九〇
六・一五、一〇二
二二、一〇三・一
五、一六、一四四・

四 賽三八・二二、
四〇・六 雅四・一四
ヨ 詩七八・三九、八九
夕 伯二〇・九

レ 母後二二・二三
ソ 伯八・二八、二〇・
九 詩一〇三・一六
ツ 詩三九・一、九、四
〇・九

ネ 母前一・一〇 伯
一〇・一
ナ 伯九・二七
ラ 伯一〇・一
ム 伯一〇・二〇、一四
ノ 伯一六・二二 哀三

六 詩三九・一三
ウ 詩六二・九
平 詩一四四・三 來二
六
才 創一八・二五 申
三三・四 代下一九
七 伯三四・二二、
一七 但九・二四 羅

三・五
夕 伯一・五、一八

二 奴僕しもべの暮くれを冀こひねがふが如ごとく傭人やとひのその價あたいを望のぞむがごとく 我われは苦くるしき月つきを得えさせられ憂うれはしき夜よをあたへらる

四 我われ臥ふば乃すなはち言いふ何時いつ夜よあけて我われおきいでんかと曙あけぼのまで頻しきりに輾轉まわぶ 五 我われが肉にくは蟲むしと土塊つちくれとを衣服ころもとなし我われ

皮かはは愈いてまた腐くさる 六 わが日は機はたの梭ひよりも迅速すみやかなり我われ望のぞむ所ところなくして之これを送おくる 七 想おもひ見みよわが生命いのちは氣息いきな

八 而のみ已み 我われ目は再び福祉さいはひを見みること有あら 八 我われを見みし者ものの眼まなこかさねて我われを見みざらん 汝なんぢ目を我われにむくるも我われは已すでに

九 在あらざるべし 雲くもの消きえて逝さるがごとく陰府よみに下くだれる者ものは重ねて上のぼりきたらじ 一〇 彼は再びその家いへに歸かへらず彼の郷里ふるさと

二 也も最早もはやかれを認みめじ 二 然さば我われはわが口くちを禁とめず 我われ心の痛いたみによりて語ものいひ わが神魂たましひの苦くるしきによりて歎なげかん

三 我われあに海うみならんや 鱷わにならんや 汝なんぢなにとて我われを守まもらせおきたまふぞ 三 わが牀とこわれを慰なぐさめ わが寢床ねどこわが愁うれを

四 解とかと思おもひをる時に 一四 汝夢なんぢのゆめをもて我われを驚おどかし 異象まぼろしをもて我われを懼おそれしめたまふ 一五 是こゝをもて我われ心こゝろは氣息いきの閉とん

五 ことを願ねがひ我われこの骨ほねよりも死しを冀こひねがふ 一六 われ生命いのちを厭いとふ 我われは永ながく生いくことを願ねがはず 我われを捨すておきたまへ 我われ日は

六 氣いきのごときなり 一七 人を如何いかなる者ものとして汝なんぢこれを大おほいにし之これを心こゝろに留とめ 一八 朝あさごとに之これを看みそなはし 時ときわかず

七 之これを試こころみたまふや 一九 何時いつまで汝なんぢわれに目めを離はなさず 我われが津つを咽のむ間まも我われを捨すておきたまはざるや 二〇 人を鑿かんがみたま

八 ふ者ものよ我われ罪つみを犯としたりとて汝なんぢに何なにをか爲なん 何なんぞ我われを汝なんぢの的まととなして我われにこの身みを厭いとはしめたまふや 二一 汝なんぢなんぞ

九 我われの愆とがを赦ゆるさず 我われ罪つみを除のきたまはざるや 我われいま土つちの中に睡ねむらん 汝なんぢ我われを尋たづねたまふとも我われは在あらざるべし

一 時にシユヒ人ひとビルダ答こたへて曰いはく 二 何時いつまで汝なんぢかゝる事ことを言いふや 何時いつまで汝なんぢの口くちの言語ことばを大風おほかぜの

三 ごとくするや 三 神かみあに審判さまを曲またまはんや 全能者ぜんんのうしやあに公義こうぎを曲またまはんや 四 汝なんぢの子等こどもかれに罪つみ

第八章

を獲たるにや 之をその愆の手に付したまへり 汝もし神に求め 全能者に祈り 清くかつ正しうしてあらば

必ず今汝を顧み汝の義き家を榮えしめたまはん 然らば汝の始は微小くあるとも 汝の終は甚だ大ならん

請ふ汝過にし代の人に問へ 彼らの父祖の尋究めしところの事を學べ (我らは昨日より有しのみにて何を

知す 我らが世にある日は影のごとし) 彼等なんぢを教へ汝を諭し言をその心より出さざらんや 葦あ

に泥なくして長んや 荻あに水なくしてそだたんや 是はその青くして未だ刈ざる時にも 他は一切の草よりは

早く稿る 神を忘るゝ者の道は凡て是のごとく 悖る者の望は空しくなる その恃む所は絶れその倚ところ

は蜘蛛網のごとし 其の家に倚かゝらんとすれば家立ず之に堅くとりすがるも保たじ 彼日の前に青緑を呈

はしその枝を園に蔓延らせ 其の根を石堆に盤みて石の屋を眺むれども 若その處より取のぞかれなばその

處これを認めずして 我は汝を見たる事なしと言ん 視よその道の喜樂是のごとし而してまた他の者地より生

いでん 其れ神は完全人を棄たまはずまた悪き者の手を執りたまはず 遂に哂笑をもて汝の口に充し歡喜を

汝の唇に置たまはん 汝を惡む者は羞恥を着せられ 惡き者の住所は無なるべし

ヨブこたへて言けるは 我まことに其事の然るを知り人いかでか神の前に義かるべけん

第九章 人は神と辨争はんとするとも 干の一も答ふること能はざるべし 神は心慧く力強くまします

なり 誰か神に逆ひてその身安からんや 彼山を移したまふに山しらず 彼震怒をもて之を翻倒したまふ 彼地

を震ひてその所を離れしめたまへばその柱ゆるぐ 日に命じたまへば日いせず 又星辰を封じたまふ 唯かれ

イ伯五・八、一一・一 二九・一五 伯七・六 ホ伯二二・二〇、一八 ト伯七・一〇、二〇 又詩一四三・二 羅三

三、二二・二三 詩三九・五、一〇二 二四、二七・八 九 詩三七・三六 二〇 七伯三六・五

口申四・三二、三三 二一、一四四・四 詩一一二・一〇 七 詩一三三・七 九 詩三三・一、二一 基

七 伯二五・一八 二 詩二九・六 耶 二 伯二〇・二八 九 詩三五・二六、一〇 又 詩二・一九、二二 基

ハ創四七・九 代上 一七・六 へ 伯二七・一八 九 二九 二・六、二二 來二二 七 伯二六・一一 詩一〇四 二・三 三 創一・一六 伯三八 三 一 慶五・八

夕伯五・九 詩七一・ 五・二四 夕伯二六・一二 賽 夕伯二・三、三四・六 夕伯一・八 夕出二〇・七
一五 夕賽四五・九 耶一八 三〇・七 夕傳九二、三結二一 九・四 耶一四・四 ノ伯七・二三 夕耶二・二二
夕伯二三・八、九、三 六・六 羅九・二〇 夕伯一〇・一五 三三 夕伯七・六、七 夕詩二一九・二二〇 マ傳六・一〇 賽四五 夕九 耶四九・一九
羅九・二〇

一〇九 獨天を張り海の濤を履たまふ 九 また北斗參宿昂宿および南方の密室を造りたまふ 一〇 大なる事を行ひたまふ

二 こと測られず 奇しき業を爲たまふこと數しれず 二一 視よ彼わが前を過たまふ 然るに我これを見ず 彼すゝみゆき

三三 賜ふ然るに我之を曉す 二二 彼奪ひ去賜ふ 誰か能之を阻まん 誰か之に汝何を爲やと言ふことを得爲ん 二三 神其

二四 震怒を息賜はず ラハブを助る者等之が下に屈む 一四 然ば我争か彼に回答を爲ことを得ん 争われ言を選びて彼と論

一五 ふ事をえんや 一五 假令われ義かるとも彼に回答をせじ 彼は我を審判く者なれば我彼に哀き求ん 一六 假令我彼を呼

一七 彼われに答たまふともわが言を聽いれ賜ひしとは我信ぜざるなり 一七 彼は大風をもて我を撃碎き故なくして我

一八 衆多の傷を負せ 一八 我に息をつかしめず 苦き事をもて我身に充せ賜ふ 一九 強き者の力量を言んか視よ此にあり

二〇 審判の事ならんか 誰か我を喚出すことを得爲ん 二〇 假令われ義かるとも我口われを惡しと爲ん 假令われ完全かる

二二 とも尙われを罪ありとせん 二二 我は全し然ども我はわが心を知ず 我生命を賤む 二三 皆同一なり 故に我は言ふ神は

二三 完全者と惡者とを等しく滅したまふと 二三 災禍の俄然に人を誅す如き事あれば 彼は辜なき者の苦難を笑ひ見たま

二四 世は惡き者の手に交されてあり 彼またその裁判人の面を蔽ひたまふ 若彼ならずば 是誰の行爲なるや

二五 わが日は驛使よりも迅く 徒に過さりて 福祉を見ず 二六 其はしること 葦舟のごとく 物を攫まんとして 飛かける

二七 驚のごとし 二七 たとひ我わが愁を忘れ 面色を改めて 笑ひをらんと 思ふとも 二八 尙この諸の苦痛のために 戰慄く

二九 なり 我思ふに 汝われを釋し 放ちたまは さらん 二九 我は罪ありとせらるゝなれば 何ぞ徒然に 勞すべけんや 三〇 われ

三二 雪水をもて 身を洗ひ 灰汁をもて 手を潔むるとも 三二 汝われを汚はしき 穴の中に 陥いれたまは ん而して 我衣も我を

三三 厭ふに いたらん 三三 神は我のごとく 人に あらざれば 我かれに 答ふべからず 我ら二箇して 共に 審判に 臨むべからず

また我らの間には我ら二箇の上に手を置くべき仲保あらず 願くは彼その杖を我より取はなしその震怒をも

て我を懼れしめたまはされ 然らば我言語て彼を畏れざらん其は我みづから斯る者と思はざればなり

第一〇章

わが心生命を厭ふ 然ば我わが憂愁を包まず言あらはし わが魂神の苦きによりて語はん われ 神に申さん我を罪ありとしたまふ勿れ何故に我とあらずふかを我に示したまへ なんぢ虐遇を爲

し汝の手の作を打棄て悪き者の謀計を照すことを善としたまふや 汝は肉眼を有たまふや 汝の觀たまふ所は

人の觀るがごとくなるや なんぢの日は人間の日のごとく汝の年は人の日のごとくなるや 何とて汝わが愆

を尋ねわが罪をしらべたまふや されども汝はすでに我の罪なきを知たまふまた汝の手より救ひいだし得る者

なし 汝の手われをいとなみ我をことごとく作り 然るに汝今われを滅したまふなり 請ふ記念たまへ

汝は土塊をもてするがごとくに我を作りたまへり 然るに復われを塵に歸さんとしたまふや 汝は我を乳のごと

く斟ぎ牛酪のごとくに凝しめたまひしに非ずや 汝は皮と肉とを我に着せ骨と筋とをもて我を編み 生命と

恩恵とをわれに授け我を眷顧てわが魂神を守りたまへり 然はあれど汝これらの事を御心に藏しおきたまへり

我この事の汝の心にあるを知る 我もし罪を犯さば汝われをみとめてわが罪を赦したまはじ 我もし行狀あ

しからば禍あらん 假令われ義かるとも我頭を擧じ其は我は衷に羞恥充ち眼にわが患難を見ればなり 我もし頭

を擧なば獅子のごとくに汝われを追打ち我身の上に復なんぢの奇しき能力をあらはしたまはん 汝はしばしば

證する者を入かへて我を攻め我にむかひて汝の震怒を増し新手に新手を加へて我を攻たまふ 何とて汝

われを胎より出したまひしや 然らずば我は氣絶え目に見らるゝこと無く 曾て有ざりし如くならん 即ち我は

イ伯九・一九 母前二 二二、三三・七 一六 拿四・三、八 へ詩一三九・一、二 賽六四・八 又詩一三九・一 二〇、二二
二五 詩三九・一〇 二伯七・一一 二伯七・一一 一 詩一三九・一四一 一 賽三三・一一 二〇、二二
口伯一三・二〇 一 王上一九・四 伯七 亦母前一六・七 七 三・一九 六 一 伯九・一一、一五、 一 賽三八・二三 哀三
ヲ詩二五・一八 一 伯三・一一

夕伯七・六、一六、八 九 詩三九・五 一〇 七 一四 歌三・七 一六 傳三・一八 羅 十 詩八八・九、一四三 二六 詩二一九六 一〇
 九 詩三九・五 一〇 七 一四 歌三・七 一六 傳三・一八 羅 十 詩八八・九、一四三 二六 詩二一九六 一〇
 夕伯七・二六、一九 一 傳三・一一 羅 一一 三五・二二、九四 一 伯五・八、二二、二二 一 詩一〇一・三 一 詩三七・六、一一二 八 鐵三・二四
 夕伯七・二六、一九 一 傳三・一一 羅 一一 三五・二二、九四 一 伯五・八、二二、二二 一 詩一〇一・三 一 詩三七・六、一一二 八 鐵三・二四
 夕伯七・二六、一九 一 傳三・一一 羅 一一 三五・二二、九四 一 伯五・八、二二、二二 一 詩一〇一・三 一 詩三七・六、一一二 八 鐵三・二四

胎より墓に持ゆかれん 二〇 わが日は幾時も无きに非ずや 願くは彼姑らく息て我を離れ我をして少しく安んぜしめ
 んことを 三二 我が往て復返ることなきその先に斯あらしめよ我は暗き地死の蔭の地に往ん 三三 この地は暗くして
 晦冥に等しく死の蔭にして區分なし 彼處にては光明も黑暗のごとし

第一章

是においてナアマ人ゾバル答へて言けるは 言語多からば豈答へざるを得んや 口おほき人あに
 義とせられんや 汝の空しき言あに人をして口を閉しめんや 汝嘲けらば人なんぢをして羞しめざ
 らんや 汝は言ふ 我教は正し我は汝の目の前に潔しと 願くは神言を出し汝にむかひて口を開き 智慧
 の秘密をなんぢに示して その知識の相倍するを顯したまはんことを 汝しれ 神はなんぢの罪よりも輕くなんぢ
 を處置したまふなり なんぢ神の深事を窮むるを得んや 全能者を全く窮むることを得んや 八 その高きこ
 とは天のごとし汝なにを爲し得んや 其深きことは陰府のごとし汝なにを知えんや 九 その量は地よりも長く海よ
 りも潤し 彼もし行めぐりて人を執へて召集めたまふ時は誰か能くこれを阻まんや 二 彼は偽る人を善く知り
 たまふ 又悪事は顧みること無して見知たまふなり 虚しき人は悟性なし その生るゝよりして野驢馬の駒のご
 とし 汝もし彼にむかひて汝の心を定め汝の手を舒べ 手に罪のあらんにはこれを遠く去れ 惡をなんぢ
 の幕屋に留むる勿れ 然すれば汝面を擧て玷なかるべく堅く立て懼るゝ事なかるべし 一六 すなはち汝憂愁を
 忘れん 汝のこれを憶ゆることは流れ去し水のごとくならん 一七 なんぢの生存らふる日は眞晝よりも輝かん 假令
 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに

一八 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 一七 忘れん 汝のこれを憶ゆることは流れ去し水のごとくならん 一七 なんぢの生存らふる日は眞晝よりも輝かん 假令
 一六 幕屋に留むる勿れ 然すれば汝面を擧て玷なかるべく堅く立て懼るゝ事なかるべし 一六 すなはち汝憂愁を
 一五 とし 汝もし彼にむかひて汝の心を定め汝の手を舒べ 手に罪のあらんにはこれを遠く去れ 惡をなんぢ
 一四 幕屋に留むる勿れ 然すれば汝面を擧て玷なかるべく堅く立て懼るゝ事なかるべし 一六 すなはち汝憂愁を
 一三 忘れん 汝のこれを憶ゆることは流れ去し水のごとくならん 一七 なんぢの生存らふる日は眞晝よりも輝かん 假令
 一二 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 一一 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 一〇 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 九 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 八 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 七 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 六 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 五 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 四 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 三 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 二 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに
 一 暗き事あるとも是は平旦のごとくならん 一八 なんぢは望あるに因て安んじ 汝の周圍を見めぐりて安然に寐るに

一八 いたらん 一九 なんぢは何にも懼れさせらるゝこと無しして偃やすまん 必ず衆多の者なんぢを悦ばせんと務む

二〇 べし 然ど悪き者は目矇み逃遁處を失なはん 其望は氣の斷ると等しかるべし 我もなんぢらと

ヨブこたへて言ふ 二 なんぢら而已まことに人なり智慧は汝らとともに死ん 我は神に頼はりて聽

同じく心あり我はなんぢらの下に立す誰か汝らの言し如き事を知ざらんや 我は神に頼はりて聽

るゝ者なるに今その友に嘲けらるゝ者となれり嗚呼正しくかつ完たき人あざけらる 安逸なる者は思ふ輕侮は

不幸なる者に附そひ足のよろめく者を俟と 掠奪ふ者の天幕は繁榮え神を怒らせ自己の手に神を携ふる者は安泰

なり 今請ふ獸に問へ然ば汝に教へん 天空の鳥に問へ然ばなんぢに語らん 地に言へ然ばなんぢに教へ

ん海の魚もまた汝に述べし 誰かこの一切の者に依てエホバの手のこれを作りしなるを知ざらんや 一切の

生物の生氣および一切の人の靈魂ともに彼の手の中にあり 耳は説話を辨へざらんやその状あたかも口の食物

を味ふがごとし 老たる者の中には智慧あり 壽長者の中には穎悟あり 智慧と權能は神に在り 智謀と

穎悟も彼に屬す 視よ彼毀てば再び建ること能はず彼人を閉こむれば開き出すことを得ず 視よ彼水を止む

れば則ち涸れ 水を出せば則ち地を滅ぼす 權能と穎悟は彼に在り 惑はさるゝ者も惑はず者も共に彼に屬す

彼は議士を裸體にして擡へゆき 審判人をして愚なる者とならしめ 王等の權威を解て反て之が腰に繩を

かけ 祭司等を裸體にして擡へゆき 權力ある者を滅ぼし 言爽なる者の言語を取除き 老たる者の了知を

奪ひ 侯伯たる者等に恥辱を蒙らせ 強き者の帶を解き 暗中より隠れたる事等を顯し 死の蔭を光明に出し

イ利二六・一六 申 二詩九一・一五 三三五、七三・二二、 七 夕後一五・三一、一 一—三

二八・六五 赤伯一六・一〇、一七 九二・七耶一二・一 七・一四、二三 賽 一〇七・四〇 但

口伯八・一四、一八 二二・六、二二・三、 馬三・一五 又伯九・四、三六・五 一九・二二、二九 二・二二

一四 箴二一・七 三〇・一 一民一六・二二 但五 九伯一・一〇 力創七・一一—二四 一四 一四 二六、哥前四・五

八伯一三・二 へ伯二一・七 詩三七 二三 徒一七・二八 ヲ賽二二・二二 獸三 三 伯一二・二三 一 伯三三・九 賽三 二六、哥前四・五

ネ詩一〇七・三八 賽 ラ申二八・二九 伯五 九・三、二六・一五 半伯二・三三、三一・ 才穢一七・二八 ヤ伯一八・四 一八九・一〇九 フ伯二七・五
ナ詩一〇七・四、四〇 ム詩一〇七・二七 三五 夕伯一七・五、三三・ マ導前二八・二二 詩 三三二 ケ詩二三・四 節一四 コ賽五〇・八 エ伯九・三四 テ詩三九・一〇

二三 國々を大にしまして之を滅ぼし 國々を廣くしまして之を舊に歸し 地の民の長たる者等の了知を奪ひこれを
二四 路なき荒野に吟行はしむ 彼らは光明なき暗にたどる 彼また彼らを酔る人のごとくによるめかしむ
二五 視よわが目これを盡く観わが耳これを聞て通達れり 汝らが知るところは我もこれを知る我は

第一三章

汝らに劣らず 然りと雖ども我は全能者に物言ん 我は神と論ぜんことをのぞむ 汝らは只
視よわが目これを盡く観わが耳これを聞て通達れり 汝らが知るところは我もこれを知る我は
汝らに劣らず 然りと雖ども我は全能者に物言ん 我は神と論ぜんことをのぞむ 汝らは只

二一 誠言を造り設くる者 汝らは皆無用の醫師なり 願くは汝ら全く黙せよ 然するは汝らの智慧なるべし 請ふ
二二 わが論ずる所を聞き 我が唇にて辨争ふ所を善く聴け 神のために汝ら悪き事を言や 又かれのために虚偽を
二三 述るや 汝ら神のために偏るや またかれのために争はんとするや 神もし汝らを鑒察たまはゞ豈善らんや

二四 汝等人を欺むくごとくに彼を欺むき得んや 汝等もし密に私しするあらば彼かならず汝らを責ん その威光
二五 なんぢらを懼れしめざらんや 彼を懼るゝ畏懼なんぢらに臨まざらんや なんぢらの諭言は灰に譬ふべしなん

二六 ぢらの城は土の城となる 黙して我にかゝはらざれ 我言語んとす 何事にもあれ我に來らば來れ 我な
二七 んぞ我肉をわが齒の間に置き わが生命をわが手に置かんや 彼われを殺すとも我は彼に依頼まん 惟われは吾

二八 道を彼の前に明かにせんとす 彼また終に我拯救とならん 邪曲なる者は彼の前にいたること能はざればなり
二九 なんぢら聴よ 我言を聴け 我が述る所をなんぢらの耳に入しめよ 視よ 我すでに吾事を言並べたり 必ず義
三〇 しとせられんと自ら知る 誰か能われと辨論ふ者あらん 若あらば我は口を緘て死ん 惟われに二の事

三一 を爲たまはざれ 然ば我なんぢの面をさけて隠れじ なんぢの手を我より離したまへ 汝の威嚴をもて我を懼れ
三二 しめたまはざれ 而して汝われを召たまへ 我こたへん 又われにも言はしめて汝われに答へたまへ 我の愆

二四 われの罪いくばくなるや 我の背反と罪とを我に知しめたまへ 何とて御面を隠し我をもて汝の敵となしたま

二五 ふや なんぢは吹廻さるゝ木の葉を感し 干あがりたる粃殻を追たまふや 汝は我につきて苦き事等を書し

二六 るし 我をして我が幼稚時の罪を身に負しめ わが足を足械にはめ 我すべての道を伺ひ 我足の周圍に限界を

二七 つけたまふ 我は腐れたる者のごとくに朽ゆき 蠱に食るゝ衣服に等し

二八 婦の産む人はその日少なくて艱難多し その來ること花のごとくにして散り其馳ること影の

第一四章

三 ごとくにして止まらず なんぢ是のごとき者に汝の目を啓きたまふや 汝われを汝の前にひきて

四 審判したまふや 誰か清き物を汚れたる物の中より出し得る者あらん 一人も無し その日既に定まりその月

五 の數なんぢに由り 汝これが區域を立て越ざらしめたまふなれば 是に目を離して安息を得させ 之をして傭人

六 のその日を樂しむがごとくならしめたまへ それ木には望あり 假令斫るゝとも復芽を出してその枝絶す

七 たとひ其根地の中に老い幹土に枯るとも 水の潤露にあへば即ち芽をふき枝を出して若樹に異ならず

八 ど人は死れば消うす 人氣絶なば安に在んや 水は海に竭き 河は涸てかわく 是のごとく人も寢臥てまた興

九 天の盡るまで目覺ず 睡眠を醒さざるなり 願はくは汝われを陰府に藏し 汝の震怒の息むまで我を掩ひ

一〇 我ために期を定め而して我を念ひたまへ 人もし死ばまた生んや 我はわが征戰の諸日の間望みをりて 我が

一一 變更の來るを待ん なんぢ我を呼たまはん而して我こたへん 汝かならず汝の手の作を顧みたまはん 今なん

一二 ぢは我の步履を數へたまふ 我罪を汝うかどひたまはざらんや わが愆は凡て囊の中に封じてあり 汝わが罪を

- イ申三三・二〇 詩 一、三三・一〇 哀 ト伯八・九 詩九〇 一、二四
- 一三三・一、四四・二 二・五 五、六、一〇三・一 チ詩一四四・三
- 四、八八・一四 賽 八賽四二・三 一、一〇三・一五、リ詩一四三・二
- 八・一四 二詩二五・七 一四四・四 賽四〇 又創五・三 詩五一・
- 口申三三・四二 伯 六伯三三・一一 六、雅一・一〇、一 五、約三・六 羅五
- 一六・九、一九・一 八伯五・七 傳二・二三 一、四・一四 彼前 二、二 弗二・三 カ伯一四・一四
- ル伯七・一 三詩一〇二・二六 賽 二二・一
- 五、一六、六五・一 夕伯一四・七
- 七、六六・二二 徒 七、六六・二二 徒
- 三、二二 羅八・二〇 ソ伯一〇・六、一四、
- 彼後三・七、一〇、一 一、三三・二七、三一・
- 一、一 默二〇・一一、 四、三四・二一 詩 五、六、八、一三九
- 一、一三 箴五・二二
- 耶三三・一九
- ソ申三三・三四 何
- 一三三・二二

ネ路一九・二二 一羅二一・三四 哥前 ウ王上八・四六 代下 九傳七・二〇 約 ノ伯三四・七 鏡一九 三三・五三・三
ナ詩九〇・二 鏡八・ 二二・二一 六・三六 伯一四・四 壹一・八・一〇 二二八 ク伯八・八
二五 二伯三二・六・七 詩一四・三 鏡二〇 半伯四・一八・二五・五 才伯四・一九 詩一四 十耳三・一七

縫こめたまふ 一八 それ山も倒れて終に崩れ 巖石も移りてその處を離る 一九 水は石を鑿ち浪は地の塵を押流す
汝は人の望を絶たまふ 二〇 なんぢは彼を永く攻なやまして去ゆかしめ彼の面容を變らせて逐やりたまふ 二一 その
子尊貴なるも彼はこれを知す 卑賤なるもまた之を曉らざるなり 三三 只己みづからその肉に痛苦を覺え 己みづか
らその心に哀く而已

第一五章

一 テマン人エリバズ答へて曰く 智者あに虚しき知識をもて答へんや 豈東風をその腹に充さんや
三 あに裨なき談益なき詞をもて辨論はんや 四 まことに汝は神を畏るゝ事を棄てその前に禱ること

を止む 五 なんぢの罪なんぢの口を教ふ 汝はみづから擇びて狡猾人の舌を用ふ 六 なんぢの口みづから汝の罪を
定む 我には非ず汝の唇なんぢの悪きを證す 七 汝あに最初に世に生れたる人ならんや 山よりも前に出来し

ならんや 八 神の御謀議を聞しならんや 智慧を獨にて藏めをらんや 九 なんぢが知る所は我らも知ざらんや 汝
が曉るところは我らの心にも在ざらんや 一〇 我らの中には白髪の人および老たる人ありて 汝の父よりも年高し

二 神の慰藉および夫の柔かき言詞を汝小しとするや 三 なんぢ何ぞかく心狂ふや 何ぞかく目をしばたゝくや
三 なんぢ是のごとく神に對ひて氣をいらだて 斯る言詞をなんぢの口よりいだすは如何ぞや 一四 人は如何なる者
ぞ如何してか潔からん 婦の産し者は如何なる者ぞ 如何してか義からん 一五 それ神はその聖者にすら信を置たま

はす 諸の天もその目の前には潔からざるなり 一六 況んや罪を取ること水を飲がごとくする 憎むべき穢れたる人を
や 一七 我なんぢに語る所あらん 聽よ 我見たる所を述ん 一八 是すなはち智者等が父祖より受て隠すところ無

く傳へ來し者なり 一九 彼らに而已この地は授けられて外國人は彼等の中に往來せしこと無りき 二〇 悪き人はその

二 生る日の間つねに悶へ苦しむ強暴人の年は數へて定めおかる 二
 三 滅ぼす者これに臨む 三 彼は幽暗を出得るとは信ぜず目ざされて劍に付さる 三
 四 尋ねありき黒暗日の備へられて己の側にあるを知る 二四 患難と苦痛とはかれを懼れしめ戰鬪の準備をなせる王の
 二五 ごとくして彼に打勝ん 二五 彼は手を伸て神に敵し傲りて全能者に悖り 二六 頸を強くし厚き楯の面を向て之に馳
 二七 かより 二七 面に肉を滿せ 腰に脂を凝し 二八 荒されたる邑々に住居を設けて人の住べからざる家石堆となるべき
 二九 所に居る 二九 是故に彼は富ず その貨物は永く保たず その所有物は地に蔓延す 三〇 また自己は黒暗を出づるに至
 三〇 らず 火焰その枝葉を枯さん 而してその身は神の口の氣吹によりて亡ゆかん 三一 彼は虚妄を恃みて自ら欺くべ
 三二 ならず 其報は虚妄なるべければなり 三三 彼の日の來らざる先に其事成べし 彼の枝は緑ならじ 三三 彼は葡萄の
 三四 樹のその熟せざる果を振落すがごとく 橄欖の樹のその花を落すがごとくなるべし 三四 邪曲なる者の宗族は零落
 三五 れ賄賂の家は火に焚ん 三五 彼等は惡念を孕み虚妄を生みその胎にて詭計を調ふ
第一六章
 一 ヨブ答へて曰く 二 斯る事は我おほく聞り汝らはみな人を慰めんとして却つて人を煩はす者なり
 三 虚しき言語あに終極あらんや汝なりにに勵されて應答をなすや 四 我もまた汝らの如くに言こと
 五 を得もし汝らの身わが身と處を換なば我は言語を練て汝らを攻め汝らにむかひて首を揺ことを得 五 また口を
 六 もて汝らを強くし唇の慰藉をもて汝らの憂愁を解ことを得るなり 六 たとひ我言を出すとも我憂愁は解す
 七 黙するとても何ぞ我身の安くなること有んや 七 彼いま已に我を疲らしむ汝わが宗族をことごとく荒せり 八
 八 ち我をして皺らしめたり 是われに向ひて見證をなすなり 又わが瘦おとろへたる狀貌わが面の前に現はれ立て

イ撒前五・三 八伯一八・二二 へ賽五九・四 十詩七・一四 賽五九 又詩三三・七、一〇九
 口詩五九・一五、一〇 二詩一七・一〇 十伯二二・一六 詩 四 何一〇・二三 二五 哀二・一五
 九・一〇 亦伯四・九 五五・二三 里伯二三・四

ル伯一〇・一六、一七 カ哀三・三〇 米五・一 ヲ伯七・二〇 ヲ伯二七・九 詩六六 ナ伯三一・三五 傳六 ヲ傳一二・五 八、二二・二六 才詩二四・四
ヲ伯一三・二四 ヲ詩三五・一五 ヲ伯三〇・一九 詩七 ・一八、一九 一〇 賽四五・九 ヲ詩八八・三、四 中伯三〇・九 ク伯六・二九
ヲ詩二二・一三 夕伯一・一五、一七 ・五 夕伯三〇・一九 詩七 夕伯一・一九 羅九・二〇 夕伯六・一、一七、二 ノ詩六・七、三一・九 才伯七・六、九・二五

九 我を攻む 九 かれ怒てわれを撕裂きかつ窘しめ我にむかひて齒を嚙鳴し我敵となり目を鋭して我を看る 一〇 彼ら

二 我にむかひて口を張り 我を賤しめてわが頬を打ち相集まりて我を攻む 一 神われを邪曲なる者に交し悪き者の

三 手に擲ちたまへり 我は安穩なる身なりしに彼いたく我を打惱まし頸を執へて我をうちくだき遂に我を立て鵠

三 となしたまひ 一 三 其の射手われを繞り圍めりやがて情もなく我腰を射透しわが膽を地に流れ出しめたまふ

一四 彼はわれを打敗りて破壊に破壊を加へ勇士のごとく我に奔かゝりたまふ 一五 われ麻布をわが肌縫つけ我角

一六 我面は泣て頼くなり我目縁には死の蔭あり 一七 然れども我手には不義あること無くわが祈禱

一八 地よ我血を掩ふなかれ 我號呼は休む處を得ざれ 一九 視よ今にても我證となる者天にありわが

二〇 眞實を表明す者高き處にあり 二〇 わが朋友は我を嘲けれども我目は神にむかひて涙を注ぐ 二一 願くは彼人のため

二二 人に神と論辨し 人の子のためにこれが朋友と論辨せんことを 二三 數年すぎさらば我は還らぬ旅路に往べし

第十七章

一 わが氣息は已にくさり 我日すでに盡なんとし 墳墓われを待つ 二 まことに嘲弄者等わが傍に在

四 まへ 誰か他にわが手をうつ者あらんや 四 汝彼らの心を閉て悟るところ無らしめたまへり 必ず彼らをして愈ら

五 しめたまはし 五 朋友を交付して掠奪に遭しむる者は 其子等の目潰るべし 六 彼われを世の民の笑柄とな

七 らしめたまふ 我は面に唾せらるべき者となれり 七 かつまた我目は憂愁によりて昏み 肢體は凡て影のごとし

八 義しき者は之に驚き 無辜者は邪曲なる者を見て憤ほる 九 然ながら義しき者はその道を堅く持ち 手の潔淨き

一〇 者はますます力を得るなり 一〇 請ふ汝ら皆ふたゝび來れ 我は汝らの中に一人も智き者あるを見ざるなり 一 一

日は已に過ぎ わが計る所わが心に冀ふ所は已に敗れたり 彼ら夜を晝に變ふ 黑暗の前に光明ちかづく 我

もし俟ところ有ば是わが家たるべき陰府なるのみ 我は黑暗にわが牀を展ぶ われ朽腐に向ひては汝はわが父な

りと言ひ蛆に向ひては汝は我母わが姉妹なりと言ふ 然ばわが望はいづくにかある 我望は誰かこれを見る者

あらん 是は下りて陰府の關に到らん之と齊しく我身は塵の中に臥靜まるべし

第一八章

シユヒ人ビルダデこたへて曰く 汝等いつまで言語を獵求むることをするや 汝ら先曉るべし

然る後われら論辨はん われら何ぞ獸畜とおもはるべけんや 何ぞ汝らの目に汚穢たる者と見らる

べけんや なんぢ怒りて身を裂く者よ 汝のためとて地めに棄られんや 譬あに其處より移されんや

き者の光明は滅され 其火の焰は照じ その天幕の内なる光明は暗くなり 其が上の燈火は滅さるべし

その強き步履は狭まり 其計るところは自分を陥いる すなはち其足に逐れて網に到り また陷阱の上を歩むに

索その踵に纏り 霜これを執ふ 索かれを執ふるために地に隠しあり 霜かれを陥しいるゝ爲に路に設けあり

怖ろしき事四方において彼を懼れしめ其足にしたがひて彼をおふ その力は饑ゑ其傍には災禍そなはり

その膚の肢は蝕壞らる 即ち死の初子これが肢を蝕壞るなり やがて彼はその恃める天幕より曳離されて

懼怖の王の許に驅やられん 彼に屬せざる者かれの天幕に住み 硫磺かれの家の上に降ん 下にてはその根

枯れ 上にてはその枝斫る 彼の跡は地に絶え 彼の名は街衢に傳はらじ 彼は光明の中より黑暗に逐やられ

世の中より驅出されん 彼はその民の中に子も無く孫も有じまた彼の住所には一人も遺る者なからん 之が

イ伯一八・二三 水伯二一・一七 詩 七伯一五・二二、二〇 又伯八・一四、一一、四・一 二二・三〇
ロ詩七三・二二 一八・二八 二二・五 耶六・二五、二〇 詩一一・二一、一 詩三四・一六、一〇 カ詩三七・一三
ハ伯一三・一四 へ伯五・二三 二〇・三、四六・五、九・一三 二二・二
ニ二・三・九、二〇・ト伯二二・一〇 詩九 四九・二九 九・一〇・七
二〇・二四・二〇 一五、三五・八 一伯一五・二三 二二・四 一四・九馬 一四・二二 耶

ヨ 耶九・三、一〇・二五 夕創三一・七 利二六 ソ伯三・二三 詩八八 ネ伯二・三四 哀二 ラ詩三一・一一、三八 ム詩四一・九、五五・
撒前四・五 撒後一 二六 八 二二、六九・八、一、一四、二〇 半伯一・一一 詩三八
・八 多一・一六 レ詩三八・一六 ツ詩八九・四四 ナ伯三〇・一二 八八・八、一八 ウ伯三〇・三〇 詩 二二

日を見るにおいて後に來る者は駭ろき 先に出し者は怖おそれん かならず悪き人の住所は是のごとく 神を知
ざる者の所は是のごとくなるべし

第一九章

ヨブこたへて曰く 一 なんぢら我心をなやまし 言語をもて我を打くこと何時までぞや 二 な
んぢら已に十次も我を辱しめ 我を悪く待ひてなほ愧るところ無し 四 假令われ眞に過ちたらんも
その過は我の身に止れり 五 なんぢら眞に我に向ひて誇り我身に羞べき行爲ありと證するならば 六 神われを
虐げその網羅をもて我を包みたまへりと知るべし 七 我虐げらるゝと叫べども答なく呼はり求むれども審理
なし 八 彼わが路の周圍に垣を結めぐらして逾る能はざらしめ 我が行く途に黑暗を蒙らしめ 九 わが光榮を褫ぎ
我冠冕を首より奪ひ 一〇 四方より我を毀ちて失しめ 我望を樹のごとくに根より抜き 一一 我にむかひて震怒を燃し
我を敵の一人と見たまへり 一二 その軍旅ひとしく進み途を高くして我に攻寄せ わが天幕の周圍に陣を張り
一三 彼わが兄弟等をして遠くわれを離れしめたまへり 一四 我を知る人々は全たく我に疎くなりぬ 一五 わが親戚は往
來を休め わが朋友はわれを忘れ 一六 わが家に寄寓る者およびわが婢等は我を見て外人のごとくす 一七 我かれらの前
にては異國人のごとし 一八 われわが僕を喚どもこたへず 我口をもて彼に請はざるを得ざるなり 一九 わが氣息は
わが妻に厭はれ わが臭氣はわが同胎の子等に嫌はる 二〇 童子等さへも我を侮どり 我起あがれば即ち我を嘲ける
二一 わが親しき友われを惡み わが愛したる人々ひるがへりてわが敵となれり 二二 わが骨はわが皮と肉とに貼り我
は僅に齒の皮を全うして逃れしのみ 二三 わが友よ汝等われを恤れめ 我を恤れめ 神の手われを撃り 二四 汝らなに
とて神のごとくして我を攻め わが肉に壓ることなきや 二五 望むらくは我言の書留られんことを 望むらくは

二四 我言書に記されんことを 望むらくは鐵の筆と鉛とをもて之を永く磐石に鑄つけおかんことを 二五 われ知る

二六 我を贖ふ者は活く後の日に彼かならず地の上に立ん 二六 わがこの皮この身の朽はてん後 われ肉を離れて神を

二七 見ん 二七 我みづから彼を見たてまつらん 我目かれを見んに識らぬ者のごとくならじ 我が心これを望みて焦る

二八 二八 なんぢら若われら如何にかれを攻んかと言ひ また事の根われに在りと言は 二九 劍を懼れよ 忿怒は劍の罰を

きたらす 斯なんぢら遂に審判のあるを知ん

第二〇章

一 ナアマ人ゾバルこたへて曰く 二 これに因てわれ答をなすの思念を起し 心しきりに之がために 急る 三 われを辱しむる警語を我聞ざるを得ず 然しながらわが了知の性われをして答ふることを

得せしむ 四 なんぢ知らずや古昔より地に人の置れしより以來 五 悪き人の勝誇は暫時にして 邪曲なる者の歡樂

は時の間のみ 六 その高天に達しその首雲に及ぶとも 七 終には己の糞のごとくに永く亡絶べし彼を見識る者は

言ん彼は何處にありやと 八 彼は夢の如く過さりて復見るべからず夜の幻のごとく追はらはれん 九 彼を見たる

目かさねてかれを見ることあらず 彼の住たる處も再びかれを見ること無らん 一〇 その子等は貧しき者に寛待を

求めん 彼もまたその取し貨財を手づから償さん 一一 その骨には少壯氣勢充り 然れどもその氣勢もまた塵の中に

彼とおなじく臥ん 二 かれ悪を口に甘しとして舌の底に藏め 三 愛みて捨ず之を口の中に含みをる 四 然ど

その食物腸の中にて變り 腹の内にて蝮の毒とならん 五 かれ貨財を吞たれども復これを吐いださん 神これを

彼の腹より推いだしたまふべし 六 かれは蝮の毒を吸ひ魑の舌に殺されん 七 かれは蜂蜜と牛酪の涌て流るゝ

河川を視ざらん 八 その勞苦て獲たる物は之を償して自ら食はず又その求めたる所有よりは快樂を得じ 九 是は

イ詩一七・一五 野前 口伯一九・二二 ホ賽一四・二三、一四 ト詩七三・二〇、九〇 一八詩三七・三六、又伯三三・二六 ヲ伯二〇・一〇、一五
一三・一二 約登三 八詩五八・一〇、一一 阿三・四 五 一〇三・一六 ル詩三六・九 耶一七 六
二詩三七・三五、三六 へ詩八三・一〇 チ伯七・八、一〇、八、リ伯二〇・一八 六

ワ 傳五・二三・一四 詩 四八・四三 歴五・レ伯一八・一一
カ 民一・一・三三 詩 一九 木伯一六・一〇、一七 詩二二・九
ヨ 賽二四・一八 耶 夕伯一六・一三 二・二三 詩三九・九
ナ 士一八・一九 伯 二九・九、四〇・四 二〇、一四、七三・ム 詩七三・五
ラ 伯二二・六 詩一七 三、一二 耶二二・一 三、二二 耶二二・一
ハ 伯二二・六 詩一七 哈一・一六 ウ 出二三・二六
ム 詩七三・五 一伯二二・一七 一伯二二・一七

二〇 彼貧しき者を虐遇げてこれを棄たればなり 假令家を奪ひとるとも之を改め作ることを得ざらん 二〇 かれは

三 其の腹に飽ことを知ざるが故に 自己の深く喜ぶ物をも保つこと能はじ 二二 かれが遺して食はざる物とは一も

三 無し 是によりてその福祉は永く保たじ 三三 其の繁榮の眞盛において彼は艱難に迫られ 乏しき者すべて手をこれ

三 以上に置ん 三三 かれ腹を充さんとすれば神烈しき震怒をその上に下しその食する時にこれをその上に降したまふ

二四 かれ 鐵の器を避けば 銅の弓これを射透す 二五 是において之をその身より拔ば 閃く簇その膽より出きたり

二六 其の天幕に遺りをる者をも焚ん 二七 天かれの罪を顯はし 地興りてかれを攻ん 二八 其の家の儲蓄は亡て 神の震怒

二九 其の日に流れ去ん 二九 是すなはち悪き人が神より受る分 神のこれに定めたまへる數なり

第二二章

一 ヨブこたへて曰く 二 請ふ汝等わが言を謹んで聽き之をもて汝らの慰藉に代よ 三 先われに容し

四 と言しめよ 我が言る後なんぢ嘲るも可し 四 わが怨言は世の人の上につきて起れる者ならんや 我

五 なんぞ氣をいらだつ可らざらんや 五 なんぢら我を視て驚ろき手を口にあてよ 六 われ思ひまはせば畏しくなり

七 て身體しきりに戦慄く 七 悪き人何とて生ながらへ老かつ勢力強くなるや 八 其の子等は其の周圍にありてその

九 前に堅く立ち 其の子孫も其の目の前に堅く立べし 九 また其の家は平安にして畏懼なく 神の杖その上に臨まじ

一〇 其の牡牛は種を與へて過らず 其の牡牛は子を産てそこなふ事なし 一一 彼等はその少き者等を外に出すこと

一二 群のごとし 其の子等は舞をどる 一二 彼等は鼓と琴とをもて歌ひ 笛の音に由て樂み 一三 其の日を幸福に暮しま

一四 ばたくまに陰府にくだる 一四 然はあれども彼等は神に言らく 我らを離れ賜へ 我らは汝の道をしることを好まず

一五 全能者は何者なれば我らこれに事ふべき 我儕これに祈るとも何の益を得んやと 視よ彼らの福祿は彼らの

二六 力に由にあらざるなり 悪人の希圖は我の興する所にあらず 悪人のその燈火を滅るゝ事幾度ありしか

二七 その滅亡のこれに臨む事 神の怒りて之に艱苦を蒙らせたまふ事幾度有しか かれら風の前の葉の如く暴風に

二八 吹さらるゝ 糠殻の如くなること幾度有しか 神かれの愆を積たくはへてその子孫に報いたまふか之を彼自己の

二九 身に報い知しむるに如かず かれをして自らその滅亡を目に視させ かつ全能者の震怒を飲しめよ その月の

三〇 數すでに盡るに於ては何ぞその後の家に關はる所あらん 神は天にある者等をさへ審判たまふなれば 誰か

三一 能これに知識を教へんや 或人は繁榮を極め全く平穩にかつ安康にして死に その器には乳充ちその骨の

三二 髓は潤ほへり また或人は心を苦しめて死し 終に福祉をあぢはふる事なし 是等は俱に齊しく塵に臥して

三三 蛆におほはる 我まことに汝らの思念を知り 汝らが我を攻撃んとするの計略を知る なんぢらは言ふ

三四 王侯の家は何に在る 悪人の住所は何にあると 汝らは路行く人々に詢ざりしや 彼等の證據を曉らざるや

三五 すなはち滅亡の日に悪人遺され 烈しき怒の日に悪人たづさへ出さる 誰か能かれに打向ひて彼の行爲を

三六 指示さんや 誰か能彼の爲たる所を彼に報ゆることを爲ん 彼は昇れて墓に到り 塚の上にて守護することを爲す

三七 谷の土塊も彼には快し 一切の人その後に従がふ 其前に行る者も數へがたし 既に是の如くなるに汝等

三八 なんぞ 徒に我を慰さめんとするや 汝らの答ふる所はたゞ虚偽のみ 是に於て人神を益する事をえんや 智人も唯みづから益す

三九 是に於てテマン人エリバズこたへて曰く 人神を益する事をえんや 智人も唯みづから益す

四〇 而巳なるぞかし なんぢ義かるとも全能者に何の歡喜かあらんなんぢ行爲を全たふするとも彼

第二二章

イ出五・二伯三四・九 八伯三三・一八 詩一 六路二二・四六 五 何一三・三 一七耶二五・一五 一 賽四〇・一三、四五 又伯三〇・一一 傳九 一 賽二六・四 彼後二
ロ伯三五・三 馬三 二伯一八・六 一四 賽一七・二三、二九 一 賽一七・一〇 一〇 詩一・四、三五・五 一 賽一四・一〇、一九 九 羅一一・三四 一 哥前二・一六 一 魯伯三〇・七 一 一 加二・一一 一

カ伯三五・七 詩一六 ヨ出二二・二六、二七 五八・七 結一八、一九六 ナ詩一三九・二一、一 ウ詩四・六
 ・二路一七・一〇 申二四・一〇一、一三 七、一六 太二五、 ツ詩六九・一、二、一 平伯二一・一六 一三・一四 詩五〇・一四、一五
 伯二四・三、九 結 四二 二四・四 哀三・五四 ラ伯一五・三三、一 詩 ノ詩五八・二〇、一〇 マ代下・一、一五 賽五八・九
 一八・二二 一伯三一・二二 賽 七、七三、一一、 二四 傳七・一七 七・四二、 七、二七・一〇 賽 五八・二四
 夕伯三一・一七 申 一〇・二 結二二・七 七、七三、一一、 二四 傳七・一七 七・四二、 七、二七・一〇 賽 五八・二四
 一五・七一、一一 賽 ソ伯一八・八一、一〇、 九四・七 ム伯二一・一四 ク詩二一九・一一 フ伯一一・一五

四 何の利益かあらん 彼汝の畏懼の故によりて汝を責め 汝を鞠きたまはんや なんぢの悪大なるにあらずや
 五 汝の罪はきはまり無し 即ち汝は故なくその兄弟の物を抑へて質となし裸なる者の衣服を剝て取り 濁く
 六 者に水を與へて飲しめず 饑る者に食物を施ささず 力ある者土地を得 貴き者その中に住む なんぢは寡婦に
 七 手を空しうして去しむ 孤子の腕は折る 是をもて網羅なんぢを環り 畏懼にはかに汝を擾す なんぢは黒暗を
 八 見ずや 洪水のなんぢを覆ふを見ずや 神は天の高に在すならずや 星辰の巔あゝ如何に高きぞや 是に
 九 よりて汝は言ふ 神なにをか知しめさん 豈よく黒雲の中より審判するを得たまはんや 濃雲かれを蔽へば彼は
 一〇 見たまふ所なし 惟天の穹蒼を歩みたまふ なんぢ古昔の世の道を行なはんとするや 是あしき人の踐たりし者
 一一 ならずや 彼等は時いまだ至らざるに打絶れその根基は大水に押流されたり 彼ら神に言けらく我儕を離れ
 一二 たまへ 全能者われらのために何を爲ことを得んと しかるに彼は却つて佳物を彼らの家に盈したまへり但し
 一三 悪人の計畫は我の與する所にあらず 義しき者は之を見て喜び 無辜者は彼らを笑ふ 曰く我らの仇は誠に
 一四 滅ぼされ 其盈餘れる物は火にて焚つくさる 請ふ汝神と和らぎて平安を得よ 然らば福祿なんぢに來らん
 一五 請ふかれの口より教誨を受け その言語をなんぢの心に藏めよ なんぢもし全能者に歸向り且なんぢの家よ
 一六 り悪を除き去ば 汝の身再び興されん なんぢの寶を土の上に置き オフルの黄金を谿河の石の中に置け 然
 一七 れば全能者なんぢの寶となり 汝のために白銀となりたまふべし 而してなんぢは又全能者を喜び且神にむか
 一八 ひて面をあげん なんぢ彼に祈らば彼なんぢに聽たまはん 而して汝その誓願をつくのひ果さん なんぢ

二九 事を爲んと定めなばその事なんぢに成ん 汝の道には光照ん 其卑く降る時は汝いふ昇る哉と 彼は謙遜者を

三〇 拯ひたまふべし 三〇 かれは罪なきに非ざる者をも拯ひたまはん 汝の手の潔淨によりて斯る者も拯はるべし

第二三章

一 ヨブこたへて曰く 我は今日にても尙つぶやきて服せず わが禍災はわが嘆息よりも重し

二 ねがはくは神をたづねて何處にか遇まつるを知り 其御座に参いたらんことを 我この愁訴を

三 その御前に陳べ口を極めて辯論はん 五 われの我に答へたまふ言を知り また其われに言たまふ所を了らん

六 かれ大なる能をもて我と争ひたまはんや 然らじ反つて我を眷みたまふべし 七 彼處にては正義人かれと辨争ふ

八 ことを得 斯せば我を鞠く者の手を永く免かるべし 八 しかるに我東に往くも彼いままさず 西に往くも亦見たてま

九 つらず 北に工作きたまへども遇まつらず 南に隠れ居たまへば望むべからず 一〇 わが平生の道は彼知たまふ

二一 彼われを試みたまはじ 我は金のごとくして出きたらん 二二 わが足は彼の步履に堅く隨がへり 我はかれの道を守り

二三 て離れざりき 我はかれの唇の命令に違はず 我が法よりも彼の口の言語を重ぜり 二三 かれは一に居る者にまし

二四 ます 誰か能かれをして意を變しめん 彼はその心に欲する所をかならず爲たまふ 二四 然ば我に向ひて定めし事を

二五 必らず成就たまはん 是のごとき事を多く彼は爲たまふなり 二五 是故に我かれの前に慄ふ 我考ふれば彼を懼る

二六 神わが心を弱くならしめ 全能者われをして懼れしめたまふ 二七 かく我は暗の來らぬ先わが面を黑暗の覆ふ

二八 前に打絶れざりき 一 なにゆゑに全能者時期を定めおきたまはざるや 何故に彼を知る者その日を見ざるや 人ありて

第二四章

一 地界を侵し 群畜を奪ひて牧ひ 孤子の驢馬を驅去り 寡婦の牛を取て質となし 貧しき者を

イ 彼二九・二三 雅四 二二 二伯九・二二 雅一・二二 二伯九・二二、二三、 二二、二四 雅九、 又詩一一五・三 又詩一九・一四、二七 何五・一〇
六 彼前五・五 八 二七、四、八、 六 詩一三九・一一三 一〇 詩四四・一八 二二、二四 雅九、 又詩一三三・三、 一〇、一
口 伯二三・三、一六、 五七、二六、 へ 詩一七・三、六六、 一 約四・三三、三四 一九 一 詩二二・一四 二八、 二三・一〇 二、一七 伯三三・六

五 路より推退け 世の受難者をして盡く身を匿さしむ 視よ彼らは荒野にをる野驢馬のごとく 出て業を爲て食を
七六 求め 野原よりその子等のために食物を得 圃にて悪き者の麥を刈り またその葡萄の遺餘を摘む かれらは
八 衣服なく裸にして夜を明し 覆ふて寒氣を禦ぐべき物なし 山の暴雨に濡れ 庇はるゝところ無し 岩を抱く
九 孤子を母の懷より奪ふ者あり 貧しき者の身につける物を取て質となす者あり 貧き者衣服なく裸にて歩き
一〇九 飢つゝ麥束を擔ふ 人の垣の内にて油を搾め また渴きつゝ酒酔を踐む 邑の中より人々の呻吟たちのほり
一一二 傷けられたる者の叫喚おこる 然れども神はその怪事を省みたまはず また光明に背く者あり 光の道を知
一三四 ず 光の路に止らず 人を殺す者味爽に興いで 受難者や貧しき者を殺し 夜は盜賊のごとくす 姦淫する者は
一五六 我を見る目はなからんと言て その目に昏暮をうかゞひ待ち 而してその面に覆ふ物を當つ また夜分家を穿つ
一七 者あり 彼等は晝は閉こもり居て 光明を知らず 彼らには晨は死の蔭のごとし 是死の蔭の怖ろしきを知ばなり
一八 彼は水の面に疾ながるゝ物の如し その産業は世の中に詛はる 其の身重ねて葡萄園の路に向はず 亢旱
一九 および炎熱は雪水を直に乾涸す 陰府が罪を犯せし者におけるも亦かくのごとし これを宿せし腹これを忘れ
二〇 蛆これを好みて食ふ 彼は最早世におぼえらるゝこと無く その悪は樹の折るがごとくに折る 是すなはち孕ま
二一 ず産ざりし婦人をなやまし 寡婦を憐れまざる者なり 神はその權能をもて強き人々を保存へさせたまふ 彼ら
二二 は生命あらじと思ふ時にも復興る 神かれらに安泰を賜へば 彼らは安らかなり 而してその目をもて 彼らの道を
二三 見そなはしたまふ かれらは旺盛になり 暫時が間に無なり 卑くなりて 一切の人のごとくに 没し 麥の穂のごとく
二四 に斷る すでに是のごとくなれば 誰か我の謬まれるを示して わが言語を空しくすることを 得ん

第二十五章

一 時にシユヒ人ビルダデこたへて曰く 神は大權を握りたまふ者畏るべき者にましまし高き處に
 二 平和を施したまふ 三 その軍旅數ふることを得んや其光明なに物をか照さざらん 四 然ば誰か神の
 五 前に正義かるべき婦女の産し者いかでか清かるべき 六 視よ月も輝かず星もその目には清明ならず 七 いはんや
 八 蛆のごとき人 九 蟲のごとき人の子をや

第二十六章

一 ヨブこたへて曰く 二 なんぢ能力なき者を如何に助けしや氣力なきものを如何に救ひしや 三 智
 四 慧なき者を如何に誨へしや穎悟の道を如何に多く示ししや 五 なんぢ誰にむかひて言語を出ししや
 六 なんぢより出しは誰が靈なるや 七 陰靈水またその中に居る者の下に慄ふ 八 かれの御前には陰府も顯露な
 九 り滅亡の坑も蔽ひ匿す所なし 一〇 彼は北の天を虚空に張り 地を物なき所に懸けたまふ 一一 水を濃雲の中に包み
 一二 たまふてその下の雲裂す 一三 御寶座の面を隠して雲をその上に展べ 一四 水の面に界を設けて光と暗とに限を立
 一五 たまふ 一六 かれ叱咤たまへば天の柱震ひかつ怖る 一七 その權能をもて海を靜め その智慧をもてラハブを撃碎き
 一八 その氣嘘をもて天を輝かせ 一九 其手をもて逃る蛇を衝とほしたまふ 二〇 視よ是等はたゞその御工作の端なるのみ
 二一 我らが聞ところの者は如何にも微細なる耳語ならずや 二二 然どその權能の雷轟に至りては誰かこれを曉らんや

第二十七章

一 ヨブまた語を繼ぎていはく 二 われに義しき審判を施したまはざる神わが心魂をなやまし給ふ
 三 全能者此神は活く 四 (わが生命なほ全くわれの衷にあり 神の氣息なほわが鼻にあり) 五 わが口
 六 は惡を言ずわが舌は謊言を語らじ 七 我決めて汝等を是とせじ 八 我は死るまで我が罪なきを言ことを息じ 九 われ
 一〇 堅くわが正義を持ちて之を棄じ 一一 我は今まで一日も心に責られし事なし 一二 我に敵する者は惡き者と成り 一三 我を攻

イ伯四・二七、一五・口詩三二・二六
 一四詩一三〇・三、ハ詩一三九・八、一一 二伯九・八 詩二四・ 六鐵三〇・四
 一四三・二 鐵一五・一一 來四 二、一〇四・二 七、一〇四・九 鐵 七四・二三 賽五一 一 詩三三・六
 一五耶三一・三五 又伯三四・五 八・二九耶五・二二 一五耶三一・三五 又伯三四・五
 一四三・二 鐵一五・一一 來四 二、一〇四・二 七、一〇四・九 鐵 七四・二三 賽五一 一 詩三三・六
 一五耶三一・三五 又伯三四・五 八・二九耶五・二二 一五耶三一・三五 又伯三四・五
 一四三・二 鐵一五・一一 來四 二、一〇四・二 七、一〇四・九 鐵 七四・二三 賽五一 一 詩三三・六

カ太一六・二六 路 一八・四一、一〇九 耶一四・一二 結八 多伯三三・二六、二七 一〇 何九・一三 二六
 一三・二〇 七 箴一・二八、 二八 米三・四約 レ伯三〇・二九 ツ詩七八・六四 ナ箴一・八 哀二・六
 ヨ伯三五・一二 詩 二八・九 賽一・一五 九・三一 雅四・三 ソ申二八・四〇 帖九 箴二八・八 傳三・ 一八・一一

八 する者は義からざる者と成るべし 邪曲なる者もし神に絶れその魂神を脱とらるゝに於ては何の望かあらん

九 かれ艱難に罹る時に神その呼號を聴いたまはんや 一〇 かれ全能者を喜ばんや常に神を頷んや 二一 われ神の

御手を汝等に教へん 全能者の道を汝等に隠さじ 二二 視よ汝等もみな自らこれを觀たり然るに何ぞ斯愚蒙をきは

むるや 二二 惡き人の神に得る分 強暴の人の全能者より受る業は是なり 二四 その子等蕃れば劍に殺さるその

子孫は食物に飽す 二五 その遺れる者は疫病に斃れて埋められその妻等は哀哭をなさす 一六 かれ銀を積こと塵の

ごとく 衣服を備ふること土のごとくならずとも 二七 その備ふる者は義き人これを着ん またその銀は無辜者これを

分ち取ん 一八 その建る家は蟲の巢のごとく また番人の造る茅屋のごとし 一九 かれは富る身にて寢臥し重ねて興る

こと無し また目を開けば即ちその身きえ亡す 二〇 懼ろしき事大水のごとく 彼に追及き 夜の暴風かれを奪ひ

去る 二二 東風かれを颺げて去り 彼をその處より吹はらふ 二三 神かれを射て恤まず 彼その手より逃れんともかく

人かれに對ひて手を鳴し 嘲りわらひてその處をいでゆかしむ

第二十八章

一 白銀は掘いだす坑あり 煉るところの黄金は出處あり 二 鐵は土より取り 銅は石より鎔して 獲るなり 三 人すなはち黑暗を破り 極より極まで尋ね窮めて 黑暗および死蔭の石を求む 四 その

穴を穿つこと深くして上に住む人と遠く相離れその上を歩む者まつたく之を覺えず是のごとく身を縋下げ 遙に

人と隔りて空に懸る 五 地その上は食物を出し 其下は火に覆へさるゝがごとく覆へる 六 その石の中には碧の

玉のある處あり 黄金の沙またその内にあり 七 その逕は鷲鳥もこれを知す 鷹の目もこれを看す 八 鷲も未

だこれを踐す 猛き獅子も未だこれを通らず 九 人堅き磐に手を加へまた山を根より倒し 一〇 岩に河を掘り各種の

二二 貴き物を目に見とめ 水路を塞ぎて漏ざらしめ 隠れたる寶物を光明に取いだすなり 然ながら智慧は

二四 何處よりか覓め得ん 明哲の在る所は何處ぞや 人その價を知らず人のすめる地に獲べからず 淵は言ふ我の

二五 内に在らずと海は言ふ我と借ならずと 精金も之に換るに足らず 銀も秤りてその價となすを得ず オフルの金

二七 にてもその價を量るべからず 貴き青玉も碧玉もまた然り 黄金も玻璃もこれに並ぶ能はず 精金の器皿もこれ

二八 一に換るに足らず 珊瑚も水晶も論にたらず 智慧を得るは眞珠を得るに勝る エテオピアより出る黄玉もこれ

二〇 二に並ぶあたはず 純金をもてするともその價を量るべからず 然ば智慧は何處より來るや 明哲の在る所は何處

二三 ぞや 是は一切の生物の目に隠れ 天空の鳥にも見えす 滅亡も死も言ふ 我儕はその風聲を耳に聞し而已

二三 神その道を曉りたまふ 彼その所を知りたまふ そは彼は地の極までも觀そなはし 天が下を看きは

二五 めたまへばなり 風にその重量を與へ水を度りてその量を定めたまひし時 雨のために法を立て雷霆の光の

二七 ために途を設けたまひし時 智慧を見て之を顯はし 之を立て試みたまへり また人に言たまはく 視よ主を

二八 畏るゝは是智慧なり 惡を離るゝは明哲なり

第二十九章

一 ヨブまた語をつぎて曰く 嗚呼過にし年月のごとくならまほし 神の我を護りたまへる日の
二 ごとくならまほし
三 かの時には彼の燈火わが首の上に耀やき彼の光明によりて我黑暗を歩めり
四 わが壯なりし日のごとくならまほし 彼時には神の恩恵わが幕屋の上にある
五 かの時には全能者なほ我と

六 ともに在し わが子女われの周圍にありき 乳ながれてわが足跡を洗ひ 我が傍なる磐油を灌ぎいだせり
七 かの時には我いでて邑の門に上りゆき わが座を街衢に設けたり 少き者は我を見て隠れ 老たる者は起あが

イ伯二八・二〇 傳七 八伯二八・二二 編 八・一〇・一一、 へ伯二八・一四
一・二四 一一・三三・三四 一九、二六・二六 ト二八・一五・三
口二・二五 二二・三一・一五、 水伯二八・二二 二詩一三五・七
リ伯三八・二五 二〇 傳二二・二三 二創四九・一一 申三 力詩八一・二六
又申四・六 詩一一一 ル伯七・三 二・二三・三三・三四
二〇 二七・九 二伯一八・六 伯二〇・一七

マ伯二二・五 一・一三、二四、二一 一七、六一・一〇、一〇 弗 一七、二九・七 一七、二九・七
夕詩一三、七、六 ソ申二四、一三、詩一 六、一四、撒前五、八 ナ詩五八、六 三〇 三〇
夕詩七三、二二 三三、九 一、一、九、三 二、一、〇、三、一 二、四 一、一、〇、一 一、一、〇、一
ラ詩三〇、六 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一 一、一、〇、一

二〇九 りて立ち 牧伯たる者も言談ずしてその口に手を當て 貴き者も聲ををさめてその舌を上齶に貼たりき 我

二〇 事を耳に聞る者は我を幸福なりと呼び我を目に見たる者はわがために證據をなしぬ 是は我助力を求むる貧し

二三 き者を拯ひ 孤子および助くる人なき者を拯ひたればなり 亡びんとせし者われを祝せり 我また寡婦の心をし

二四 て喜び歌はしめたり われ正義を衣また正義の衣る所となれり 我が公義は袍のごとく冠冕のごとし われは

二六 盲者の目となり 跛者の足となり 貧き者の父となり 知ざる者の訴訟の由を究め 惡き者の牙を折りその齒

二八 の間より獲物を取いだせり 我すなはち言けらく 我はわが巢に死ん 我が日は砂のごとく多からん わが根

三〇 は水の邊に蔓り 露わが枝に終夜おかん わが榮光はわが身に新なるべくわが弓はわが手に何時も強からんと

三一 人々われに聽き 黙して我が教を俟ち わが言し後は彼等言を出さず 我説ところは彼等に甘露のごとく

三四 かれらは我を望み待つことと雨のごとく 口を開きて仰ぐことと春の雨のごとくなりき われ彼等にむかひて笑

三五 ふとも彼等は敢て眞實とおもはず 我面の光を彼等は除くことをせざりき われは彼等のために道を擇びその

三六 首として座を占め 軍中の王のごとくして居り また哀哭者を慰さむる人のごとくなりき

第三〇章

一 然るに今は我よりも年少き者等われを笑ふ 彼等の父は我が賤しめて群の犬と並べ置くことをも
二 せざりし者なり またかれらの手の力もわれに何の用をかなさん 彼らは其氣力すでに衰へたる

三 者なり かれらは缺乏と饑とによりて瘦おとろへ荒かつ廢れたる暗き野にて乾ける地を咬む すなはち灌木

四 の中にて藜を摘み 蒼の根を食物となす かれらは人の中より逐いださる 盜賊を追ふがごとくに人かれらを
五 追て呼はる 彼等は懼ろしき谷に住み 土坑および磐穴に居り 灌木の中に嘶なき荆棘の下に偃す 彼らは

ヨ ブ 記 二九・九——三〇・八

九 愚蠢なる者の子卑むべき者の子にして國より撃いださる

九 しかるに今は我かれらの歌謡に成り彼らの嘲哂

二〇 となれり 一〇 かれら我を厭ふて遠く我を離れ またわが面に唾することを辭まず 神わが綱を解て我をなやまし

三 たまへば 彼等もわが前にその韁を縦せり 二二 この輩わが右に起あがりわが足を推のけ 我にむかひて滅亡の路を

二四 築く 一三 彼らは自ら便なき者なれども尙わが逕を毀ちわが滅亡を促す 一四 かれらは石垣の大なる崩口より入がご

二五 とくに進み來り 破壊の中にてわが上に乗かゝり 一五 懼ろしき事わが身に臨み 風のごとくに我が尊榮を吹はらふ

二六 わが福祿は雲のごとくに消失す 一六 今わが心われの衷に鎔て流れ 患難の日かたく我を執ふ 一七 夜にいれば

二八 我骨刺れて身を離る わが身を噬む者つひに休むこと無し 一八 わが疾病の大なる能によりて わが衣服は醜き様に

二九 變り 裏衣の襟のごとくに我身に固く附く 一九 神われを泥の中に投こみたまひて我は塵灰に等しくなれり 二〇 われ

三 汝にむかひて呼はるに汝答へたまはず 我立をるに汝只われをながめ居たまふ 二二 なんぢは我にむかひて無情

三三 なりたまひ 御手の能力をもて我を攻撃たまふ 三三 なんぢ我を擧げ風の上に乗て負去しめ 大風の音とともに消亡

三四 しめたまふ 三三 われ知る汝はわれを死に歸らしめ 一切の生物の終に集る家に歸らしめたまはん 三四 かれは

三五 必らず荒埜にむかひて手を舒たまふこと有じ 假令人滅亡に陥るとも是等の事のために號呼ぶことをせん 三五 苦み

三六 て日を送る者のために我哭ざりしや 貧しき者のために我心うれへざりしや 二六 われ吉事を望みしに凶事きたり

三七 光明を待しに黑暗きたれり 二七 わが腸沸かへりて安からず 患難の日われに追及ぬ 二八 われは日の光を蒙らずし

三九 て哀しみつゝ歩き 公會の中に立て助を呼もとむ 二九 われは山犬の兄弟となり 駝鳥の友となれり 三〇 わが皮は

三二 黒くなりて剝落ち 三二 わが骨は熱によりて焚け 三二 わが琴は哀の音となり わが笛は哭の聲となれり

イ伯一七・六 詩三五 口民二一・一四 申二 三〇
・一五、六九・一二 五・九 寮五〇・六 八伯二二・一八
哀三・一四、六三 太二六・六七、二七 二伯一九・二二
水詩四二・四 羅一二・一五 九、四三・二
へ來九・二七 耶八・一五 又詩一〇二・六 米一
ト詩三五・一三、一四 詩三八・六、四三・ 八
ル詩二一九・八三 哀 四・八、五・一〇
ヲ詩一〇二・三

ワ太五・二八 三代下二六・九 伯 耶三三・一九 太五・二九
カ伯二〇・二九、二七 三四・二二 燬五・ 夕民一五・三九 傳 利二六・一六 申 八・一〇
一三 二一、一五・三 一一・九 結六・九 二八・三〇、三八 ツ制三八・二四 利二〇 ネ詩四四・二一 伯三一・二八 一四・三一、二二・ ム伯二二・九 二馬二・一〇

第三一章

一 我わが目と約を立たり 何ぞ小艾を慕はんや 然せば上より神の降し給ふ分は如何なるべきぞ
二 高處より全能者の與へ給ふ業は如何なるべきぞ 惡き人には滅亡きたらざらんや 善らぬ事を爲す
三 者には常ならぬ災禍あらざらんや 彼わが道を見そなはしわが步履をことごとく數へたまはざらんや
四 我虚誕とつれだちて歩みし事ありや わが足詐偽に奔從がひし事ありや 請ふ公平き權衡をもて我を稱れ 然
五 ば神われの正しきを知たまはん わが步履もし道を離れ わが心もしわが目に隨がひて歩み わが手にもし汚の
六 つきてあらば 我が播たるを人食ふも善し わが産物を根より拔るゝも善し われもし婦人のために心ま
七 よへる事あるか 又は我もしわが隣の門にありて伺ひし事あらば わが妻ほかの人のために白磨きほかの人々
八 かれの上に乗るも善し 其は是は重き罪にして 裁判人に罰せらるべき惡事なればなり 是はすなはち滅亡に
九 までも燬いたる火にしてわが一切の産をことごとく絶さん わが僕あるひは婢の我と辨争ひし時に我もし之が
一〇 權理を輕んぜし事あらば 神の起あがりたまふ時には如何せんや 神の臨みたまふ時には何と答へまつらんや
一一 われを胎内に造りし者また彼をも造りたまひしならずや われらを腹の内に形造りたまひし者は唯一の者なら
一二 すや 我もし貧き者にその願ふところを獲しめず寡婦をしてその目おとろへしめし事あるか または我
一三 獨みづから食物を啖ひて孤子にこれを啖はしめざりしこと有るか (却つて彼らは我が若き時より我に育てら
一四 れしこと父におけるが如し 我は胎内を出てより以來寡を導びくことをせり) われ衣服なくして死んとする
一五 者あるひは身を覆ふ物なくして居る人を見し時に その腰もし我を祝せず また彼もしわが羊の毛にて温まら
一六 ざりし事あるか われを助くる者の門にをるを見て我みなしごに向ひて手を上し事あるか 然ありしならば

肩骨よりしてわが肩おち骨とはなれてわが腕折よ 神より出る災禍は我これを懼る その威光の前には我能力

なし 我もし金をわが望となし 精金にむかひて汝わが所頼なりと言しこと有か 我もしわが富の大なる

とわが手に物を多く獲たるとを喜びしことあるか われ日の輝くを見 または月の輝わたりて歩むを見し時

心竊にまよひて手を口に接しことあるか 是もまた裁判人に罪せらるべき悪事なり 我もし斯なせし事あら

ば上なる神に背しなり 我もし我を悪む者の滅亡るを喜び 又は其災禍に罹るによりて自ら誇りし事あるか

(我は之が生命を呪ひ索めて我口に罪を犯さしめし如き事あらず) わが天幕の人は言ずや彼の肉に飽ざる

者いづこにか在んと 旅人は外に宿らず わが門を我は街衢にむけて啓けり 我もしアダムのごとくわが罪

を蔽ひ わが悪事を胸に隠せしことあるか すなはち大衆を懼れ 宗族の輕蔑に怖ぢて口を閉ぢ門を出ざりしご

とき事あるか 嗚呼われの言ところを聽わくる者あらまほし (我が花押こゝに在り 願くは全能者われに答へ

たまへ) 我を訴ふる者みづから訴訟狀を書け われ必らず之を肩に負ひ冠冕のごとくこれを首に結ばん 我

わが步履の數を彼に述ん 君王たる者のごとくして彼に近づかん わが田圃號呼りて我を攻め その阡陌ことご

とく泣さけぶあるか 若われ金を出さずしてその産物を食ひ またはその所有主をして生命を失はしめし事あ

らば 小麥の代に蒺藜生いで 大麥のかはりに雜草おひ出るとも善し ヨブの詞をはりぬ

ヨブみづから見て己を正義とするに因て此三人の者之に答ふことを止む 時にラムの族ブジ

人バラケルの子エリフ怒を發せり ヨブ神よりも己を正しとするに因て 彼ヨブにむかひて怒を發せ

り またヨブの三人の友答ふるに詞なくして猶ヨブを罪ありとせしによりて彼らにむかひても怒を發せり

第三二章

イ賽一三・六 耳一・六・一七 二申四・一九、一一・一七・一七・五 一六、一七・三 太五・四四 羅二二 一三・二三 來一三 二八・二三 何六・七 ヲ伯一三・三二 口可一〇・二四 提前 一・二八 永伯三・一〇 一・四 一・二 彼前四・九 又出二三・二 一 九・二〇、二二 羅 一 三・八、一二 鐵 一 九 伯三三・六 一 九 伯三三・一八

四 エリフはヨブに言ふことをひかへて俟をりぬ是は自己よりも彼等年老たればなり 茲にエリフこの三人の口

六 に答ふる詞の有ざるを見て怒を發せり 六 ブヅ人バラケルの子エリフすなはち答へて曰く我は年少く汝等は

七 年老たり是をもて我はどかりて我意見をなんぢらに陳ることを敢てせざりき 七 我意へらく日を重ねたる者宜し

八 く言を出すべし年を積たる者宜しく智慧を教ふべしと 八 但し人の衷には靈あり 全能者の氣息人に聰明を與ふ

九 大なる人すべて智慧あるに非ず 老たる者すべて道理に明白なるに非ず 然ば我言ふ 我に聴け 我もわが意見

二 視よ我は汝らの言語を俟ちなんぢらの辨論を聴きなんぢらが言ふべき言語を尋ね盡すを待り

三 われ細になんぢらに聴しが汝らの中にヨブを駁折る者一人も無くまた彼の言語に答ふる者も無し 一三 おそら

四 くは汝等いはん 我ら智慧を見得たり 彼に勝つ者は唯神のみ 人は能はずと 彼はその言語を我に向て發さざり

五 き 我はまた汝らの言ふ所をもて彼に答へじ 一五 かれらは愕ろきて復答ふる所なく 言語かれらの衷に浮ばず

六 彼等ものいはず立とどまりて重ねて答へざればとて 我あに俟をるべけんや 一七 我も自らわが分を答へわが

八 意見を吐露さん 一八 われには言滿ちわが衷の心しきりに迫る 一九 わが腹は口を啓かざる酒のごとし 新しき皮囊

二〇 のごとく今にも裂んとす 二〇 われ説いたして胸を安んぜんとす われ口を啓きて答へん 二二 かならず我は人に偏

三 らず 人に諂はじ 二三 我は諂らふことを知ずもし諂らはゞ我の造化主たゞちに我を絶たまふべし

第三三章

一 然ばヨブよ請ふ我が言ふ事を聴けわが一切の言詞に耳を傾むけよ 二 視よ我口を啓き 舌を口の
二 中に動かす 三 わが言ふ所は正義き心より出づわが唇あきらかにその知識を陳ん 四 神の靈われ
六 を造り 全能者の氣息われを活しむ 五 汝もし能せば我に答へよ わが前に言をいひつらねて立て 六 われも汝と

おなじく神の者なり 我もまた土より取てつくられしなり わが威嚴はなんぢを懼れしめず わが勢はなんぢを

壓せず 汝わが聴くところにて言談り 我なんぢの言語の聲を聞けり云く われは潔淨くして愆なし 我

は辜なく悪き事わが身にあらず 視よ彼われを攻る罅隙を尋ね われをおのれの敵と算へ わが脚を桎に夾め

わが一切の舉動に目を着たまふと 視よ我なんぢに答へん なんぢ此事において正義からず 神は人よりも大な

る者にいませり 彼その凡て行なふところの理由を示したまはずとて汝かれにむかひて辯争そふは何ぞや

まことに神は一度二度と告示したまふなれど人これを曉らざるなり 人熟睡する時または床に睡る時に夢

あるひは夜の間の異象の中にて かれ人の耳をひらきその教ふるところを印して堅うし 斯して人にその惡

き業を離れしめ 傲慢を人の中より除き 人の靈魂を護りて墓に至らしめず 人の生命を護りて劍にほるびざら

しめたまふ 人床にありて疼痛に攻られその骨の中に絶ず戰鬥のあるあり その氣食物を厭ひその靈魂

うまき物をも嫌ふ その肉は瘦おちて見えすその骨は見えざりし者までも顯露になり その靈魂は墓に近よ

りその生命は滅ぼす者に近づく しかる時にもし彼とともに一箇の使者あり 千の中の一箇にして中保と

なり 正しき道を人に示さば 神かれを憫れみて言給はん彼を救ひて墓にくだること無らしめよ 我すでに收贖

の物を得たりと その肉は小兒の肉よりも瑞々しくなり その若き時の形狀に歸らん かれ若し神に禱らば

神かれを顧りみ 彼をしてその御面を喜こび見ることを得せしめたまはん 神は人の正義に報をなしたまふべし

かれ人の前に歌ひて言ふ 我は罪を犯し正しきを枉たり 然ど報を蒙らず 神わが靈魂を贖ひて墓に下らしめ

ずわが生命光明を見ん そもそも神は是等のもろもろの事をしばしば人におこなひ その靈魂を墓より

イ伯九・三四、一三三、七、二一・四、一六、二四、三三・一、二伯一三・二七、一四、へ伯四〇・五、詩六二、一三三、
二一、二七、二二・三、一〇、八伯一三・二四、一六、一六、三三・一、一三、チ伯三六・一〇、一五、又母後二二・一三、
口伯九・一七、一〇、二二、二七、五、二九、九、一九、一一、六、一、二、三、四、ト民二二・六、伯四、リ詩一〇七・一八、二二、
約登一・九、二八、一三、路一五、ヲ伯三三・二八、ル賽三八・一七

詩三四・二一
 九伯六・三〇、一一
 一
 三伯三三・九
 九伯二七・二
 九伯九・一七
 九伯一五・一六
 九伯九・二二・二三・三
 〇、三五・三 馬三
 一四
 九伯九・一四
 九伯一八・二五 申三
 九伯二二・二二 箴二
 九伯二一 耶三二
 九伯八・三三・三六
 七 詩九二・一五
 九伯二二・二〇 結三三・二〇
 九伯一六・二七 羅二
 九伯一〇・四・二九
 九伯一〇・二九 傳二二
 九伯一〇・二七 代下
 九伯一八・二五 母後
 九伯二二・二八
 九伯二二・二八 代下
 九伯一八・二五 母後
 九伯二二・二八
 九伯二二・二八 代下
 九伯一八・二五 母後
 九伯二二・二八
 九伯二二・二八 代下

率かへし生命の光明をもて彼を照したまふ 三二
 ヨブよ耳を傾むけて我に聽け 請ふ黙せよ 我かたらん 三三
 もし言ふべきことあらば我にこたへよ 請ふ語れ 我なんぢを義とせんと欲すればなり 三三
 もし無ば我に聽け 請ふ黙せよ 我なんぢに智慧を教へん

第三章

エリフまた答へて曰く 三
 なんぢら智慧ある者よ我言を聽け 知識ある者よ我に耳を傾むけよ 四
 口の食物を味はふがごとく耳は言語を辨まふ 四
 われら自ら是非を究めわれらもろともに善惡を 五
 明らかにせん 三
 それヨブは言ふ我は義し神われに正しき審判を施したまはず 六
 われは義しかれども 偽る者 七
 とせらる 我は愆なけれどもわが身の矢創愈がたしと 七
 何人かヨブのごとくならん 彼は罵詈を水のごとくに飲 八
 み 惡き事を爲す者等と交はり 惡人とともに歩むなり 九
 すなはち彼いへらく 人は神と親しむとも身に益な 一〇
 しと 然ばなんぢら心ある人々よ我に聽け 神は惡を爲すこと決めて無く 全能者は不義を行ふこと決めて 一一
 無し 却つて人の所爲をその身に報い 人をしてその行爲にしたがひて獲るところあらしめたまふ 一二
 かならず 神は惡き事をなしたまはず 全能者は審判を枉たまはざるなり 一三
 たれかこの地を彼に委ねし者あらん 誰か全世界 一四
 を定めし者あらん 神もしその心を己にのみ用ひその靈と氣息とを己に收回したまはゞ 一五
 もろもろの血肉と 一六
 とごとく亡び 人も亦塵にかへるべし 一七
 なんぢもし曉ることを得ば請ふ我に聽け わが言詞の聲に耳を側だ 一八
 てよ 公義を惡む者あに世ををさむることを得んやなんぢあに至義き者を惡しとすべけんや 一九
 王たる者にむ 一八
 かひて汝は邪曲なりと言ひ 牧伯たる者にむかひて汝らは惡しといふべけんや 一九
 まして君王たる者をも偏視す 一九

貧しき者に越て富る者をかへりみるごとき事をせざる者にむかひてをや 斯爲たまふは彼等みな同じくその御手の作る所なればなり 彼らは瞬く時間に死に 民は夜の中に滅びて消失せ 力ある者も人手によらずして除かる 神の目は人の道の上にある 神は人の一切の歩履を見そなはず 悪を行なふ者の身を匿すべき 神は人をして審判を受しむるまでに長くその人を窺がふに及ばず 権勢ある者をも 査ぶることを須ひずして打ほろぼし他の人々を立て之に替たまふ かくのごとく彼らの所爲を知り夜の中に彼らを覆がへしたまへば彼らは乃て滅ぶ 人の觀るところにて彼等を悪人のごとく撃たまふ 是は彼ら背きて之に従はずその道を全たく顧みざるに因る かれらは是のごとくして遂に貧しき者の號呼を彼の許に達らしめ 患難者の號呼を彼に聽しむ かれ平安を賜ふ時には誰か悪しと言ふことをえんや 彼面をかくしたまふ時には誰かこれを見るを得んや 一國におけるも一人におけるも凡て同じ かくのごとく邪曲なる者をして世を治むること無し 民の機檻となることなからしむ 人は宜しく神に申すべし 我は已に懲しめられたり再度悪き事を爲じ わが見ざる所は請ふ我にをしへたまへ 我もし悪き事を爲たるならば重ねて之をなさじと かれ豈なんぢの好むごとくに應報をなしたまはんや 然るに汝はこれを咎む 然ばなんぢ自らこれを選ぶべし 我は爲じ汝の知るところを言へ 心ある人々は我に言ん 我に聽ところの智慧ある人々は言ん ヨブの言ふ所は辨知なし その言語は明哲からずと ねがはくはヨブ終まで試みられんことを 其は悪き人のごとくに應答をなせばなり まことに彼は自己の罪に愆を加へ われらの中間にありて手を拍ちかつ言語を繁くして神に逆らふ

第三十五章

エリフまた答へて曰く 二 なんぢは言ふ 我が義しきは神に愈れりと なんぢ之を正しとおもふや

イ伯三一・一五 三・四 詩三四・一七、三三・一九 一三
 口出二二・二九、三〇 一五 箴五・二二、二 詩一三九・一二、一四 亦伯三・二二
 八代下一六・九 伯 一五・三 耶一六・九・二、三 來四・一 何前二五・二一
 卜詩二八・五 賽五・一 又王上一二・二八、 九伯九・七一、一四
 又王上一二・二八、 三〇 又王上一二・二八、 三〇 又王上一二・二八、 三〇

一〇九 八 七 六五 四三
 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

すなはち汝いへらく是は我に何の益あらんや罪を犯すに較ぶれば何の愈るところか有んと 四 われ言語をもて

汝およびなんぢにそへる汝の友等に答へん 天を仰ぎて見よ 汝の上なる高き空を望め 六 なんぢ罪を犯すとも

神に何の害か有ん 愆を熾んにするとも神に何を爲えんや 七 なんぢ正義かるとも神に何を興るを得んや 神なん

ぢの手より何をか受たまはん 八 なんぢの悪は只なんぢに同じき人を損ぜん而已なんぢの善は只人の子を益せん

のみ 九 暴虐の甚だしきに因て叫び 權勢ある者の腕に壓れて呼はる人々あり 一〇 然れども一人として我を

造れる神は何處にいますやといふ者なし 彼は人をして夜の中に歌を歌ふに至らしめ 一一 地の獸畜よりも善く

われらを教へ 空の鳥よりも我らを智からしめたまふ者なり 一二 悪き者等の驕傲ぶるに因て斯のごとく人々叫べ

ども應ふる者あらず 一三 虚しき語は神かならず之を聽たまはず 全能者これを顧みたまはじ 一四 汝は我かれを見た

てまつらずと言といへども 審判は神の前にあり この故に汝かれを待べきなり 一五 今かれ震怒をもて罰すること

を爲す 罪愆を深く心に留たまはざる(が如くなる)に因て 一六 ヨフロを啓きて虚しき事を述べ 無知の言語を繁くす

第三十六章
 事あればなり 一 暫らく我に容せ 我なんぢに示すこと有ん 尙神のために言ふべき
 二 われ廣くわが知識を取り 我の造化主に正義を歸せんとす 四 わが言語は眞實に

虚偽ならず 知識の完全き者なんぢの前にあり 五 視よ神は權能ある者にましますせども 何をも藐視めたまはず

その了知の權能は大なり 六 惡しき者を生し存す 艱難者のために審判を行ひたまふ 七 義しき者に目を離さず

位にある王等とともに永遠に坐せしめて之を貴くしたまふ 八 もし彼ら鍊索に繋がれ 艱難の繩にかゝる時は

九 彼らの所行と愆尤とを示してその驕れるを知らせ 彼らの耳を開きて教を容しめ かつ悪を離れて歸れよと彼ら
 一〇 彼らの所行と愆尤とを示してその驕れるを知らせ 彼らの耳を開きて教を容しめ かつ悪を離れて歸れよと彼ら
 二一 命じたまふ もし彼ら聴したがひて之に事へなば繁昌てその日を送り 楽しくその年を涉らん 若かれら
 二二 聴したがはずば刀劍にて亡び 知識を得ずして死なん しかれども心の邪曲なる者等は忿怒を蓄はへ 神に縛し
 二三 めらるゝとも祈ることを爲す かれらは年わかしくして死亡せ 男娼とその生命をひとしうせん 神は艱難者を
 二四 艱難によりて救ひ 之が耳を虐遇によりて開きたまふ 然ば神また汝を狭きところより出して狭からぬ廣き所
 二五 に移したまふあらん 而して汝の席に陳ぬる物は凡て肥たる物ならん 今は悪人の鞫罰なんぢの身に充り
 二六 審判と公義となんぢを執ふ なんぢ忿怒に誘はれて嘲笑に陥いらざるやう慎しめよ 收贖の大なるが爲に自ら
 二七 誤るなかれ なんぢの號叫なんぢを艱難の中より出さんや 如何に力を盡すとも所益あらじ 世の人のその
 二八 處より絶るゝ其夜を慕ふなかれ 慎しみて悪に傾むくなかれ 汝は艱難よりも寧ろ之を取んとせり それ神
 二九 はその權能をもて大なる事を爲したまふ 誰か能く彼のごとくに教誨を垂んや たれか彼のためにその道を定
 三〇 めし者あらんや 誰かなんぢは悪き事をなせりと云ふことを得ん なんぢ神の御所爲を讚歎ふることを忘
 三一 れざれ これ世の人の歌ひ崇むる所なり 人みな之を仰ぎ觀る 遠き方より人これを視たてまつるなり 神は
 三二 大なる者にいまして我儕かれを知たてまつらず その御年の數も計り知るべからず かれ水を細にして引あげ
 三三 たまへば霧の中に滴り出て雨となるに 雲これを降せて人々の上に沛然に灌ぐなり たれか能く雲の舒展
 三四 る所以 またその幕屋の響く所以を了知んや 視よ彼その光明を自己の周圍に繞らし また海の底をも蔽ひたま

イ伯三三・一六、二三 一六詩五五・二三 一七詩四九・七
 口伯二一・一三 一三 一八詩一八・一九、三一 一四詩一・一四
 二九、二〇 一八、二一、一八、五 一八詩六六・一八
 八羅二・五 一三詩二三・五 一五詩一・一五
 二伯一五・三二、三三 一三詩三六・八 一四詩四〇・一三、一四 一五詩九二・五 一五 一六詩一・一五
 羅一一・三四 一四 一五詩一・一五
 一六詩一・一五 一七詩一・一五
 一八詩一・一五 一九詩一・一五
 一〇詩一・一五 一一詩一・一五
 一二詩一・一五 一三詩一・一五
 一四詩一・一五 一五詩一・一五
 一六詩一・一五 一七詩一・一五
 一八詩一・一五 一九詩一・一五
 二〇詩一・一五 二一詩一・一五
 二二詩一・一五 二三詩一・一五
 二四詩一・一五 二五詩一・一五
 二六詩一・一五 二七詩一・一五
 二八詩一・一五 二九詩一・一五
 三〇詩一・一五 三一詩一・一五
 三二詩一・一五 三三詩一・一五
 三四詩一・一五 三五詩一・一五
 三六詩一・一五 三七詩一・一五
 三八詩一・一五 三九詩一・一五
 四〇詩一・一五 四一詩一・一五
 四二詩一・一五 四三詩一・一五
 四四詩一・一五 四五詩一・一五
 四六詩一・一五 四七詩一・一五
 四八詩一・一五 四九詩一・一五
 五〇詩一・一五 五一詩一・一五
 五二詩一・一五 五三詩一・一五
 五四詩一・一五 五五詩一・一五
 五六詩一・一五 五七詩一・一五
 五八詩一・一五 五九詩一・一五
 六〇詩一・一五 六一詩一・一五
 六二詩一・一五 六三詩一・一五
 六四詩一・一五 六五詩一・一五
 六六詩一・一五 六七詩一・一五
 六八詩一・一五 六九詩一・一五
 七〇詩一・一五 七一詩一・一五
 七二詩一・一五 七三詩一・一五
 七四詩一・一五 七五詩一・一五
 七六詩一・一五 七七詩一・一五
 七八詩一・一五 七九詩一・一五
 八〇詩一・一五 八一詩一・一五
 八二詩一・一五 八三詩一・一五
 八四詩一・一五 八五詩一・一五
 八六詩一・一五 八七詩一・一五
 八八詩一・一五 八九詩一・一五
 九〇詩一・一五 九一詩一・一五
 九二詩一・一五 九三詩一・一五
 九四詩一・一五 九五詩一・一五
 九六詩一・一五 九七詩一・一五
 九八詩一・一五 九九詩一・一五
 一〇〇詩一・一五

ノ伯五・九、九・一〇、才詩一四七・一六、一十詩一〇四・二二
 三六・二六 歌一五 七 伯三八・二九・三〇 ケ詩一四八・八 一八
 三 夕詩一〇九・二七 詩一四七・一七、フ出九・一八・二三 母 三二
 前二・一八、一九 ヲ伯三八・二六・二七 一〇・九 伯三六 五 母後二一・一〇 王
 一八・四四 上 一八・四四 五 伯三六・二九 一 伯三六・四 二四
 一・一六 卷四・

三三 三二 三二
 ひ これらをもて民を鞠き また是等をもて食物を豊饒に賜ひ 電光をもてその兩手を包み その電光に命じて敵を撃しめたまふ
 三三 三三 三三
 その鳴聲かれを顯はし家畜すらも彼の來ますを知らすなり

第三十七章

一 之がためにわが心わなよきその處を動き離る 神の聲の響およびその口より出る轟聲を善く
 三 聽け 三 これを天が下に放ち またその電光を地の極にまで至らせたまふ 四 その後聲ありて打響

六 五 四 三 二 一
 き 彼威光の聲を放ちて鳴わたりたまふ その御聲を聞えしむるに當りては電光を押へおきたまはず 神奇しく
 も御聲を放ちて鳴わたり 我儕の知ざる大なる事を行ひたまふ 六 かれ雪にむかひて地に降れと命じたまふ 雨
 すなはちその權能の大雨にも亦しかり 斯かれ一切の人の手を封じたまふ 是すべてのの人にその御工事を知し

七 八 九 一〇
 めんがためなり また獸は穴にいりてその洞に居る 南方の密室より暴風きたり 北より寒氣きたる 一〇 神
 の氣吹によりて氷いできたり 水の寛狭くせらる 二 かれ水をもて雲に搭載せ また電光の雲を遠く散したまふ

三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
 三三 是は彼の導引によりて廻る 是は彼の命するところを盡く世界の表面に爲んがためなり 一三 其の之を來らせた
 二四 まふは或は懲罰のためあるひはその地のため 或は恩惠のためなり 一四 ヨブよ是を聽け 立ちて神の奇妙き
 二五 工作进行がへよ 神いかに是等に命を傳へその雲の光明をして輝やかせたまふか 汝これを知るや 一六 なんぢ
 二六 雲の平衡知識の全たき者の奇妙き工作を知るや 一七 南風によりて地の穩かになる時なんぢの衣服は熱くなるなり
 二七 なんぢ彼とともに彼の堅くして鑄たる鏡のごとくなる蒼穹を張ることを能せんや 一九 われらが彼に言ふべき
 二八 事を我らに教へよ 我らは暗昧して言詞を列ぬること能はざるなり 三〇 われ語ることありと彼に告ぐべけんや 人
 二九 あに滅ぼさるゝことを望まんや 三二 人いまは雲霄にて輝やく光明を見ること能はず 然れど風きたりて之を

吹清む 北より黄金いできたる 神には畏るべき威光あり 全能者はわれら測りきはむることを得ず 彼は能
 おほいなる者にいまし審判をも公義をも枉たまはざるなり この故に人々かれを畏る 彼はみづから心に有智
 とする者をかへりみたまはざるなり

第三十八章

茲にエホバ大風の中よりヨブに答へて宣まはく 無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰
 ぞや なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ 我なんぢに問ん 汝われに答へよ 地の基を我
 が置たりし時なんぢは何處にありしや 汝もし穎悟あらば言へ なんぢ若知んには誰が度量を定めたりしや 誰
 が準繩を地の上に張りたりしや その基は何の上に奠れたりしや その隅石は誰が置たりしや かの時には
 晨星あひともに歌ひ 神の子等みな歡びて呼はりぬ 海の水ながれ出て 胎内より涌いでし時誰が戸をもて
 之を閉こめたりしや かの時我雲をもて之が衣服となし 黑暗をもてこれが襦袢となし これに我法度を
 定め關および門を設けて 曰く此までは來るべし 此を越べからず 汝の高浪こゝに止まるべしと なん
 ぢ生れし日より以來朝にむかひて命を下せし事ありや また黎明にその所を知しめ これをして地の縁を取へ
 て悪き者をその上より振落さしめたりしや 地は變りて土に印したるごとくに成り 諸の物は美はしき衣服の
 ごとくに顯る また悪人はその光明を奪はれ 高く擧たる手は折らる なんぢ海の泉源にいたりしこと
 ありや 淵の底を歩みしことありや 死の門なんぢのために開けたりしや 汝死蔭の門を見たりしや なんぢ
 地の廣を看きはめしや 若これを盡く知ば言へ 光明の在る所に往く路は孰ぞや 黑暗の在る處は何處ぞや
 なんぢ之をその境に導びき得るや その家の路を知るや なんぢ之を知ららん 汝はかの時すでに生れをり

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

イ提前六・一六 二太二一・二五 哥前 王上一九・一一 結 卜伯三四・三五、四二 詩一〇四・五 箴八 ル制一九 詩三三・ 一 詩八九・九、九三・四 力詩一〇四・三五
 口伯三六・五 一・二六 一・四 箴一・三 二九、三〇・四 七、一〇四・九 箴 一 詩七四・一六、 三 伯一八・五
 八太二〇・二八 ホ出一九・一六、一八 へ提前一・七 三 伯四〇・七 又伯一・六 八・二九 耶五・二二 一四八・五 夕詩一〇・一五

レ詩七七・一九
ソ詩九・二三
ツ詩一三五・七
ネ出九・一八 書一〇 歌一六・二一
二一 卷三〇・三〇 ナ伯二八・二六
結一三・二一、一三
ヲ詩一〇七・三五
ム詩一四七・八 耶
ウ詩一四七・一六
中伯三七・一〇
ノ伯九・九 歴五・八
オ耶三一・三五
ク伯三二・八 詩五一
六傳二・二六
ヤ詩一〇四・二一、一
四五・一五
マ詩一四七・九 太六
ケ詩二九・九

また汝の経たる日の數も多ければなり 三三
ために蓄はへ 戦争および闘撃の日のために蓄はへ置くものなり 三四
は何處ぞや 二五
誰が大雨を灌ぐ水路を開き 雷霆の光の過る道を開き 二六
降し 荒かつ廢れたる處々を潤ほし かつ若菜蔬を生出しむるや 二七
氷は誰が胎より出るや 空の霜は誰が産むところなるや 二八
なんぢ昂宿の鏈索を結びうるや 參宿の繫繩を解うるや 二九
いだし得るや また北斗とその子星を導びき得るや 三〇
なんぢ天の常經を知るや 天をして其權力を地に施こさしむるや 三一
なんぢ聲を雲に擧げ 滂沛の水をして汝を掩はしむるを得るや 三二
なんぢ閃電を遣はして往しめ 三三
なんぢに答へて我儕は此にありと言しめ得るや 三四
胸の中の智慧は誰が與へし者ぞ 心の内の聰明は誰が授けし者ぞ 三五
たれか能く智慧をもて雲を數へんや 三六
塵をして一塊に流れあはしめ 土塊をしてあひかたまらしめんや 三七
なんぢ牝獅子のために食物を獵や また小獅子の食氣を満すや 三八
その洞穴に伏し森の中に隠れ伺がふ時 三九
また鴉の子神にむかひて呼はり食物なくして徘徊る時 四〇
時鴉に餌を與ふる者は誰ぞや 四一

第三十九章

なんぢ岩間の山羊が子を産む時をしるや 一
また麋鹿の産に臨むを見しや 二
月を數へうるや また是等が産む時を知るや 三
これらは身を鞠めて子を産みその痛苦を出すや 四
またその子は強くなりて野に育ち 出ゆきて再びその親にかへらす 五
誰が野驢馬を放ちて自由にせし 六

七六 や 誰が野驢馬の繫縛を解しや 六 われ野をその家となし 荒地をその住所となせり 七 是は邑の喧鬧を賤しめ
 九八 馭者の呼號を聴いれず 八 山を走まはりて草を食ひ 各種の青き物を尋ぬ 九 兕肯て汝に事へなんぢの飼草槽の
 一〇 傍にとどまらんや 一〇 なんぢ兕に綱附て阡陌をあるかせ得んや 是あに汝にしたがひて谷に馬鈿を牽んや
 一一 その力おほいなればとて汝これに恃まんや またなんぢの工事をこれに任せんや 一二 なんぢこれにたよりて己
 一二 が穀物を運びかへらせ 一三 之を打禾場にあつめしめんや 一四 駝鳥は歡然にその翼を鼓ふ 然どもその羽と毛と
 一三 はあに鶴にしかんや 一四 是はその卵を土の中に棄おき これを砂の中にて暖たまらしめ 一五 足にてその潰さるべ
 一四 きと野の獸のこれを踐むべきとを思はず 一六 これはその子に情なくして宛然おのれの子ならざるが如くしその
 一五 劬勞の空しくなるも繫念ところ無し 一七 是は神これに智慧を授けず 穎悟を與へざるが故なり 一八 その身をおこ
 一六 して走るにおいては馬をもその騎手をも嘲けるべし 一九 なんぢ馬に力を與へしや その頸に勇ましき鬣を粧
 一七 ひしや 二〇 なんぢ之を蝗蟲のごとく飛しむるや その嘶なく聲の響は畏るべし 二一 谷を脚爬て力に誇り 身ら進み
 一八 て兵士に向ふ 二二 懼るゝことを笑ひて驚ろくところ無く 劍にむかふとも退ぞかず 二三 矢筒その上に鳴り 鎗に矛
 一九 あひきらめく 二四 猛りつ狂ひつ地を一呑にし 喇叭の聲鳴わたるも立どまる事なし 二五 喇叭の鳴ごとくにハハハ
 二〇 と言ひ 遠方より戦闘を嗅つけ 將帥の大聲および呐喊聲を聞しる 二六 鷹の飛かけり その羽翼を舒て南に向
 二一 ふは豈なんぢの智慧によるならんや 二七 鷲の翔のぼり高き處に巢を營なむは豈なんぢの命令に依んや 二八 これは
 二二 岩の上に住所を構へ 岩の尖所または峻險き所に居り 二九 其處よりして攬むべき物をうかゞふその目のおよぶ
 二三 ところ遠し 三〇 その子等もまた血を吸ふ 凡そ殺されし者のあるところには是そこに在り

イ伯二四・五 耶三・ 三三・一七 水耶四九・一六 阿四
 二四 何八・九 八哀四・三 太二四・二八 路
 口民三三・二二 申 二伯三五・一一 一七・三七

ト伯三三・一三
チ九・六伯四二・六
詩五一・四
リ伯二九・九 詩三九
ル伯三八・三
カ伯三七・四 詩二九
タ賽二・二二 伯四
ソ詩一〇四・二四
ツ賽三七・二九
又伯三八・一
ヲ詩五一・四 羅三・四
ヨ詩九三・一、一〇四
三七

第四〇章

一 エホバまたヨブに對へて言たまはく 二 非難する者エホバと争はんとするや 神と論ずる者これ
に答ふべし 三 ヨブ是においてエホバに答へて曰く 四 嗚呼われは賤しき者なり 何となんぢ

に答へまつらんや 唯手をわが口に當んのみ 五 われ已に一度言たり 復いはじ 已に再度せり 重ねて述じ

六 是においてエホバまた大風の中よりヨブに應へて言たまはく 七 なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ

八 我なんぢに問んなんぢ我にこたへよ 九 なんぢ我審判を廢んとするや 我を非として自身を是とせんとするや

一〇 なんぢ神のごとき腕ありや 神のごとき聲をもて轟きわたらんや 一〇 さればなんぢ威光と尊貴をもて自

ら飾り 榮光と華美とをもて身に纏へ 二 なんぢの溢るゝ震怒を洩し 高ぶる者を視とめて之をことごとく卑くせ

三 よ すなはち高ぶる者を見てこれを盡く鞠ませ また悪人を立所に踐つけ 三 此れを塵の中に埋め 此れが面を

隠れたる處に閉こめよ 四 さらば我もなんぢを讚て なんぢの右の手なんぢを救ひ得ると爲ん 一五 今なんぢ

一六 我がなんぢとともに造りたりし河馬を視よ 是は牛のごとく草を食ふ 一六 觀よその力は腰にあり その勢力は腹の

筋にあり 一七 その尾の揺く様は香柏のごとく その腿の筋は彼此に盤互ふ 一八 その骨は銅の管のごとく その肋骨

一九 は鐵の棒のごとし 一九 此れは神の工の第一なる者にして 之を造りし者これに劍を賦けたり 二〇 山も此れが

二 ために食物を産出し もろもろの野獸そこに遊ぶ 二二 此れは蓮の樹の下に臥し 葦蘆の中または沼の裏に隠れをる

二三 蓮の樹その蔭をもてこれを覆ひ また河の柳これを環りかこむ 二三 たとひ河荒くなるとも驚ろかず ヨルダン

二四 その口に注ぎかゝるも惶てず 二四 その目の前にて誰か之を執ふるを得ん 誰か罽をその鼻に貫ぬくを得ん

二五 第四一章 なんぢ鈎をもて鱈を釣いだすことを得んや 二 其の舌を糸にひきかゝることを得んや 二 なんぢ葦

三　の繩をその鼻に通し　また鉤をその齧に衝とほし得んや　三是あに頻になんぢに願ふことをせんや　柔かになんぢ
 四　に言談んや　四あに汝と契約を爲んや　なんぢこれ執て永く僕と爲しおくを得んや　五なんぢ鳥と戯むるゝ如
 六　くこれとたはむれ　また汝の婦女等のために之を繋ぎおくを得んや　六また漁夫の社會これを商貨と爲して商賣
 七　人の中間に分たんや　七なんぢ漁叉をもてその皮に満し　魚矛をもてその頭を衝とほし得んや　八手をこれに
 九　下し見よ　然ばその戰鬪をおぼえて再びこれを爲ざるべし　九視よその望は虚し之を見てすら倒るゝに非ずや
 一〇　何人も之を激する勇氣あるなし　然ば誰かわが前に立うる者あらんや　一〇誰か先に我に與へしところありて我
 一一　をして之に酬いしめんとする者あらん　普天の下にある者はことごとく我有なり　一一我また彼者の肢體とそ
 一二　の著るしき力とその美はしき身の構造とを言では措じ　一二誰かその外甲を剝ん　誰かその雙齧の間に入ん　一三誰
 一三　かその面の戸を開きえんや　その周圍の齒は畏るべし　一三その並列る鱗甲は之が誇るところ　その相闘たる様は堅
 一四　く封じたるがごとく　一四此と彼とあひ接きて風もその中間にいるべからず　一五一一あひ連なり堅く膠て離すこと
 一五　を得ず　噓すれば即はち光發す　その目は曙光の眼瞼を開くに似たり　一五その口よりは炬火いで火花發し
 一六　その鼻の孔よりは煙いできたりて　宛然葦を焚く釜のごとし　一六その氣息は炭火を蒸し　火燄その口より出づ
 一七　氣力その頸に宿る　懼るゝ者その前に彷徨まよふ　一七その肉の片は密に相連なり　堅く身に着て動かす可らず
 一八　その心の堅硬こと石のごとく　その堅硬こと下磨のごとし　一八その身を興す時は勇士も戰慄き　恐怖によりて
 一九　狼狽まどふ　劍をもて之を撃とも利す　鎗も矢も漁叉も用ふるところ無し　一九是は鐵を見ること稿のごとくし
 二〇　銅を見ること朽木のごとくす　弓箭もこれを逃しむること能はず　投石機の石も稿屑と見做る　二〇棒も是に

イ羅一・三五
 口出二九・五申一〇
 一〇・二六二八
 五〇・二二 新前
 一四 詩二四・一

ハ割一八・一四 太 路一八・二七
一九・二六 可一〇 二伯三八・二
二七、一四・三六 ホ特四〇・五
ヘ伯三八・三、四〇・七 リ太五・二四
ト喇九・六 伯四〇・四 ヌ割二〇・二七 雅五
チ民二二・一 二五、一六 約登 一
五・一六 五詩一四・七、一二六
ヲ賽四〇・二
ワ伯一九・二三

三〇 は稿屑と見ゆ 鎗の閃めくを是は笑ふ 三〇 その下腹には瓦礫の碎片を連れ 泥の上に麥打車を引く 三一 淵をして鼎
三二 のごとく沸かへらしめ 海をして香油の釜のごとくならしめ 三三 己が後に光る道を遺せば 淵は白髪をいたゞける
三四 かと疑がはる 地の上には是と並ぶ者なし 是は恐怖なき身に造られたり 是は一切の高大なる者を輕視す
誠まことに諸もろくの誇ほこり高たかぶる者ものの王わうたるなり

第四二章

一 ヨブ是に於てエホバに答へて曰く 我知る汝は一切の事をなすを得たまふ また如何なる意志
二 にも成あたはざる無し 無知をもて道を蔽ふ者は誰ぞや 斯われは自ら了解ざる事を言ひ 自ら
三 知ざる測り難き事を述たり 請ふ聽たまへ 我言ふところあらん 我なんぢに問まつらん 我に答へたまへ 五 われ
四 汝の事を耳にて聞わたりしが 今は目をもて汝を見たてまつる 是をもて我みづから恨み 塵灰の中にて悔ゆ
五 エホバ是等の言語をヨブに語りたまひて後 エホバ、テマン人エリバズに言たまひけるは 我なんぢと汝の

六 二人の友を怒る 其はなんぢらが我に關て言述べたるところは わが僕ヨブの言たることのごとく正當からざれば
七 なり 然ば汝ら牡牛七頭 牡羊七頭を取てわが僕ヨブに至り 汝らの身のために燔祭を獻げよ わが僕ヨブなんぢ
八 らのために祈らん われかれを嘉納べければ 之によりて汝らの愚を罰せざらん 汝らの我について言述べたるとこ
九 ろは我僕ヨブの言たることのごとく正當からざればなり 是においてテマン人エリバズ、シユヒ人ビルダデ、

一〇 ナアマ人ゾバル往てエホバの自己に宣まひしごとく爲ければ エホバすなはちヨブを嘉納たまへり
一〇 ヨブその友のために祈れる時 エホバ、ヨブの艱難をときて舊に復ししかしてエホバつひにヨブの所有物
二 二倍に増たまへり 是において彼の諸の兄弟諸の姉妹およびその舊相識る者等ことごとく來りて彼とともに

にその家にて飲食を爲しかつエホバの彼に降したまひし一切の災難につきて彼をいたはり慰さめまた各金
 一 ケセタと金の環一箇を之に贈れり エホバかくのごとくヨブをめぐみてその終を初よりも善したまへり
 二 即ち彼は綿羊一萬四千匹 駱駝六千匹 牛一千耦 牝驢馬一千匹を有り また男子七人 女子三人ありき かれ
 三 その第一の女をエミマと名け 第二をケジアと名け 第三をケレンハツブクと名けたり 全國の中にてヨブの
 四 女子等ほど美しき婦人は見えざりきその父之にその兄弟等とおなじく産業をあたへたり この後ヨブは百四十
 五 年いきながらへてその子その孫と四代までを見たり かくヨブは年老い日満て死たりき

ヨブ記をばり

イ伯八・七 雅五・一一 二伯五・二六 鐵三・
 ロ伯一・三 一六
 ハ伯一・二 ホ制二五・八